

## 北米・ハワイ漂流奇談(その2・完)

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	60
号	2
ページ	112-67
発行年	2013-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/8262">http://hdl.handle.net/10114/8262</a>

## 北米・ハワイ漂流奇談

（その二・完）

宮 永 孝

十三 撰津・栄力丸

十四 伝聞でんぐん

十五 漂流民が伝えたハワイ事情

参考文献

十三 撰津・栄力丸

（嘉永三年「二八五二」十月、紀州熊野浦の沖において漂流し、十七名ちゅう十一名が帰国）

太平洋上でアメリカ商船「オークランド」号によって救助され、サンフランシスコに連れてゆかれる。まず密輸監視艦に、ついで米艦に移され、香港、上海へむかう。途中、ハワイ島のヒロに寄り、船頭・満蔵を埋葬する。香港で一行十六名は、米艦サスケハナ号に移乗させられる。十六名ちゅう九名は、サスケハナ号を抜けて陸路乍浦ツァーをめざすが、対岸の九龍半島の山中で追いはぎに身ぐるみをはぎとられる。しかたがなく、一同サスケハナにもどる。

仙太郎と彦蔵（アメリカ名——サム・パッチとジョゼフ・ヒコ）だけは、アメリカで学校教育をうけ、受礼する。仙太郎は帰国後、宣教師宅の

ボーイとして、彦蔵は通訳や実業家として活躍する。

嘉永三年九月十五日（一八五〇・一〇・二〇）——この日撰津国<sup>うはら</sup>兎原郡大石村（現・神戸市灘区大石）の松屋八三郎の新造船「栄力丸」（千五百石積み、乗組員十七名）は、大石村を出帆し江戸へむかった。

栄力丸に乗っていたのは、つぎの十七名である。

船頭	万蔵	（六十歳）	播州 <sup>ばんしゅう</sup> 加古郡宮西村「兵庫県南部」	ハワイ諸島にむかう米艦で亡くなり、ハワイ島のヒロに埋葬。
楯取 <sup>かじり</sup>	長助	（四十九歳）	播州神戸	帰国
賄方	浅五郎	（三十四歳）	播州西本庄	帰国
	甚八	（三十六歳）	同 右	帰国
	幾松	（三十七歳）	播州神戸	帰国
	喜代蔵	（三十二歳）	播州東本庄	帰国
	清太郎	（二十八歳）	播州西本庄	帰国
	徳兵衛	（二十九歳）	備中 <sup>びちゅう</sup> 「岡山県西部」	帰国
	京介	（三十一歳）	讃岐安次	長崎において病死。
	治作	（二十七歳）	播州西本庄	金星門 <sup>カミサモン</sup> においてアメリカ本国へ連れ帰られる。
	安太郎	（二十六歳）	播州宮西村	薩州 <sup>ママ</sup> 樺嶋 <sup>かばしま</sup> （長崎半島南端）沖において病死。
	民蔵	（二十六歳）	伊予 <sup>いよ</sup> 「愛媛県」岩木	帰国
	亀蔵	（二十二歳）	芸州 <sup>げいしゅう</sup> 「広島県」棕浦 <sup>もくのうら</sup>	金星門においてアメリカ本国へ連れ帰られる。
	岩吉	（二十二歳）	紀州塩津浦	帰国

乍浦にて出奔。のち駐日英公使オールコックのボーイとなる。

炊方 仙太郎（十八歳） 芸州瀬戸田 上海において米艦「サスケハナ」号に残される。  
茶汲 彦太郎（十五歳） 播州東本庄 帰国 金星門においてアメリカ本国へ連れ帰られる。のちのジョセフ・ヒコ。

表方 利七（二十七歳） 伯州<sup>はくしゅう</sup>「鳥取県西半部」長瀬村 帰国

注・茂住実男の翻刻と解題「『漂流記談』——栄力丸乗組員・利七漂流記談」『大倉山論集（二）』第三十六輯所収、平成6・12を参照してまとめたもの。

栄力丸はところどころの港に寄ったのち、十月十九日江戸に到着した。大河端<sup>れいがしまた</sup>霊岸島（隅田川河口西岸の商業地区）の井上新八郎方に積荷を送りとどけたのち、同二十三日、江戸を出帆して浦賀へむかった。当地で大豆・麦・ほしイワシ・酒かすなど四百石ほど積みこむと、同二十六日出帆した。

栄力丸が帰航の途につくとき、茶汲の彦太郎（のちのジョセフ・ヒコ）が、住吉丸から栄力丸に乗り移ってきた。

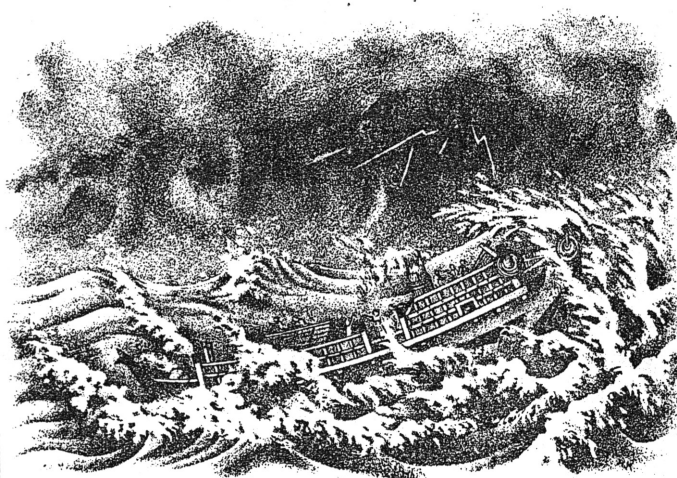
十月二十六日に浦賀を出帆したとき、東風がゆるやかに吹き、下田沖にいたるまで天気もよかった。その後、大しけに見舞れた栄力丸が約二カ月漂流をつづけ、太平洋上で米国商船「オークランド」号（船長・ジェニングズ）に救出されるまでのあらましを記すと、つぎのようになる。

嘉永三年（一八五〇）十月二十九日………朝は晴天であったが、夕方には曇りだし、夜五時半時（九時）ごろより雨がふりだし、風浪とも大きくくなった。

三十日………風が一時やわらいだので半分ほど帆を揚げたが、にわかに北西の風が吹きおこったので再び帆をさげた。

昼九ッ（十二時）ごろ、波風がはげしくなり、船はいまにも転覆しそうになったので、やむなく帆柱を切りすてた。午後、西方に山がみえた（沢田彦蔵「漂流記」）。

十一月一日………風波がようやくおさまリ、南西の風がやわらかに吹いた。帆桁<sup>ほげた</sup>（帆柱のうえに横に渡した帆を張る材）を帆柱の代用とし、日本の陸地をめざして船を走らせた。



栄力丸の図

南の方に日本の船がみえたが、午後には姿を消した。夜四ツ時（十時）ごろ、つよい北風が吹きだしたので、また帆をおろし、風にまかせて漂流した。三人の見はりを残し、みな眠りについた（土方久徴 共訳『開国逸史』アメリカ彦蔵自叙伝『ぐろりあ そさえて刊、昭和7・10』）。

二日……北の風が西風にかわり、東へ走った。午後、東の方角に山がかすかに見えた。

三日……快晴。東方へ漂流していった。南々東の方向に無人島（のちに「青ヶ島」——八丈島の南約七〇キロ——であることを知る）を遠見した。

四日……無人島を見失う。

五日……はげしい西風が吹きはじめ、大しけとなる（利七「漂流記談」）。

十一月六日から同月十二日まで、仮の帆柱を立て、風にしがたって走った。みなひたすら神仏の加護を願った。

十三日……あけがたになって、風雨がはげしくなった。怒とうはいまにも船を呑みこむかとおもわれたので、積荷の豆や大麦を四〇〇梱（こ）すてた。休むひまのない荒しごとに一同疲労をあらわにした。

十一月十四日から同月二十九日ごろまで天気はよく、この間にカツオやさわらなど釣って食

べ、残りを干物<sup>ひもの</sup>にして貯えた。一同、なすべきことがなく、退屈をおぼえたので、クルミがあることを思いつき、それを絞って三合ほど油をとった。また潮水を蒸溜して飲水をつくったが、薪炭を多量に要するのでやめた。

また船頭は、二十三夜を信仰し、毎月これを祭ることを例にしていた。そこで粥をたいて、ぼたもち<sup>ぼたもち</sup>をつくり、月のまゑに供えて、みんなで食べた。

柴力丸のミソやしょう油、飲水はすでに尽きかけてはいたが、さいわい米だけは沢山あった。釣道具を出して、いらいのようなものを釣りあげたが、ミソやしょう油がないと食物とならず、干物にして貯えた。また飲水を惜しむあまり、飯をたくほかは一滴たりとも自由に飲むことをゆるされなかった。潮水<sup>うしお</sup>を炊いてえた水であったから、一人前の飯をにぎりめしにして食べた。

やがて十一月は無事にすぎ、月が変って十二月になった。

十二月一日……………一同、船艙において金庫をあけ、金貨を持ちだし、それを賭けて花札<sup>はなふだ</sup>をはじめた。みな夢中になって、しばしばくちをたのしんだが、勝っても負けても、床のうえにばらまかれている金貨を所有することに関心はなかった。

余命いくばくもない命——みな金銭の無用なることを悟っていたからである。

二日……………天気はよかった。が、寒気がとても強かった。

三日……………曇天。夕方、雪がふりだした。

四日……………この日も曇天。夕方、雨がふりだした。のちつよい西風が吹きだした。

五日……………西風がつよくなったり、やわらいだりした。が、やがて烈風大波がおこり、舳先<sup>へさき</sup>が打ちくだかれ、そこから多量の潮水が入ってきた。

船頭の命をうけて、水主のひとりが船中に入り、水の量をはかったところ、深さは六尺（約一・八メートル）ほどあった。そのため一同力をうしない、死を覚悟し、水を汲みだそうとする者がいなかった。

そのうち水主のひとりが、むなしく死を待つより、勢いいっぱい働き、それでもかなわぬときは、

それも天命だといって皆をはげましたので、一同そのことばに力をえて、水を汲みだし、ついに潮の入り込むところを修復することができた。

十二月六日から同月十九日ごろまで、何事もなく、西風もおだやかであった。

二十日……船は数十日間、大洋の大浪にゆられていたために、釘のゆるみが生じた。そのためろろで大網を船に巻きつけた。

また潮水を蒸溜して水をたくわえたが、三ッ時（六時間）かかって得た水は、わずかに六、七合であった。

十二月二十一日……夜明けの七ッ時（四時）、水主の安太郎が船の表に出て神仏をおがんでみると、遠くに帆影のようなものをみたので、寝ているみなを起こした。よってみなが甲板に出てみると、それはたしかに異国船であった。

やがてこの異国船は、栄力丸とすれちがうまで近づいた。漂民らは、このときはじめて異国船の形をはっきり見たのであるが、それは無数に帆を張った三本マストの大きな船であった。

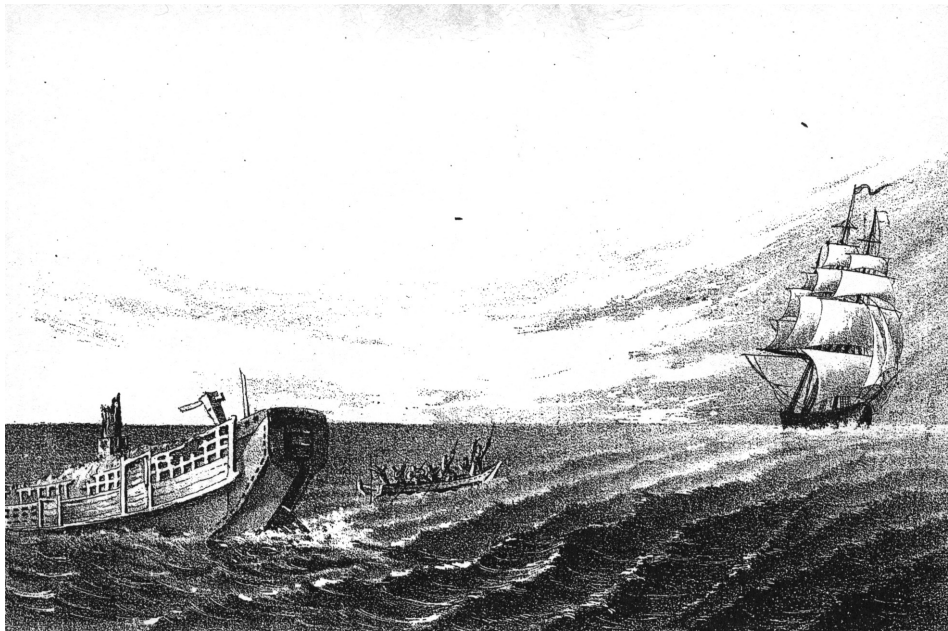
のちに判明するのだが、この異国船は、中国からサンフランシスコにもどる途中のアメリカ商船「オークランド号」（バーク型帆船）であった。漂流民らは、生まれてはじめて見る異国船とその人間とはおもえぬ乗組員たちを見ると、多少恐怖をおぼえたが、この機会を逃すと、助からないとおもい、竿のはしに古着をつけて振った。すると相手はそれを遭難信号と解したらしく、手まねで、こちらに來い、といった。

漂民たちは、ろをこいで異国船に近づこうとするが、なかなか進まなかった。久しくじゅうぶんな食事をとっていないために体力がなく、せっかく異国船のそばまで行ってもこぎ寄せることができなかった。

そのため相手の船は、船体を廻し、船から網を投げ、漂民の船を引きよせてくれた。やがて縄ばしごが下ろされ、日本人をひとりひとり引きあげてくれた。

甲板のうえに上った漂民たちは、土下座し、手をあわせ、日本式におじぎをして、救助の恩を謝した。船中を見回してわかったことは、みな白人や黒人からなる異人であったことである。その数は、十二名であった。乗組員はいつたいに粗暴であ





栄力丸がアメリカ商船「オークランド」号に救助される図。

ったが、漂民には親切であった。けれど外国人の容貌に見慣れていなかったから、なんとなく恐ろしかった。

やがて船は、予定の航路を走りだした。船では救助劇もひととおり終ったので、船長は中国のコックをつれて日本人のところにやってきた。その中国人は墨と筆を用いて、紙のうえに、「金山」とかき、船を指した。また「米利加<sup>アメリカ</sup>」の文字もかいた。一同「金山」のほうは船名であろうと思った。「米利加」の文字は、どうにか理解できた。この船が金山をもつカリフォルニアにむけて航行ちゅうであることを、サンフランシスコに到着するまでわからなかった。

二十二日……朝、ゆで卵とパンをくれた。船は

順風にのって進んでいた。四ッ時

（十時）ごろ、航海士が地球の図

（地図）をひろげ、この船はアメ

リカの船で中国からカリフォルニ

アへもどるところである、と手ま

ねでいったので、漂民らはそのあ

らましが推察できた。

ついで航海士は、地図をさして――

「ジャパン」（日本）

「ジェド」（江戸）

「チャイナ」（中国）

といった語を口にしたが、「ジャパン」とはこの国なのか。「ジェド」とは何の



ことがわからなかった。日本や江戸にしても、こんな小さな所だとはおもっていないから、一同の疑いは晴れなかった。つぎに大きな陸地を指さし、「チャイナ」といったが、そこが中国だとは気づかなかった。

（当時日本では、中国のことをたいがい「唐」とか「唐国」、あるいは「南京」と呼んでいた。）

正午をすぎるところ、ボーイに呼ばれ食堂へ行った。食卓に出されたものは、――

バターを塗った菓子のような固まり（ホットケーキか？）と黒砂糖

スープ 吸物（蚕豆「空豆」と塩肉と采の目のように切ったパンが入っている）

などであった。

バター付のパンのようなものは、何ともいえぬ臭気に胸くそがわるくなり、彦太郎（十五歳、のちのジョゼフ・ヒコ）などは、人しれず袂に入れ、あとで海中に投棄したという。

吸物のほうは、ひじょう香ばしい臭いがした。

夕食のとき、船長は漂流のうち何人かを招き、ビスケット、塩づけ肉、コーヒーなどを出してくれたが、日本人は一人として肉には手をつけなかった。

そうした様子をみた異人は、食物の習慣がちがうためにとまどっているのだろうと察し、魚肉や野菜の類は生でくれ、米は榮力丸から持ってきたものを食べさせてくれた。

日がたつうちに、船中の乗組員が病気になる、人手不足が生じたので、漂流のうち二人を手伝いとして借りうけたいとの話があり、一同評議の結果、

彦太郎（十五歳）

利七（二十七歳）

の二人が手伝うことになった。

彦太郎は調理場のしごとを、利七は船中の雑用をそれぞれ手伝い、乗組員に立ちまじって働いた。

船中のしごとを手伝うにあたり、両人は日本の着物を脱がされ、フランネル下着、洋服を着せられた。ふたりは洋服を着るのがはじめての経験



利七

であり、すこし窮屈な感じはしたが、和服よりも体をうごかすのに便利な気がした。

二十六日……四ッ時（十時）ごろ、怪しい叫び声を耳にしたので、彦太郎が何かとおもって行ってみると、中国人のコックがブタを殺すところであった。

薩摩の国や琉球あたりでは、ブタを屠殺して食べるといった話を聞いたことがあるが、生きたブタを殺すのを見る最初の経験であったので、漂民はみんな恐怖した。

数日後、海がおだやかなとき、船長は水夫に命じて船艙をひらき、換気をおこなった。そのとき漂民らは茶、砂糖、米、ビスケットなどの食糧がじゅうぶんあることを知り、ブタのように食べられるのではないかといった、かつての憂いは消えた。

船は翌年の正月二十二日まで、帆を揚げカリフォルニアを指して帆走した。

嘉永四年正月二十三日（一八五一・二・二三）——曇天。ゆるやかな北風が吹いていた。昼ごろ、明日はカリフォルニアの山が見えるはずである、と船長はいった。水夫のひとりが帆柱に登り、望遠鏡で陸地がある方向をみていた。

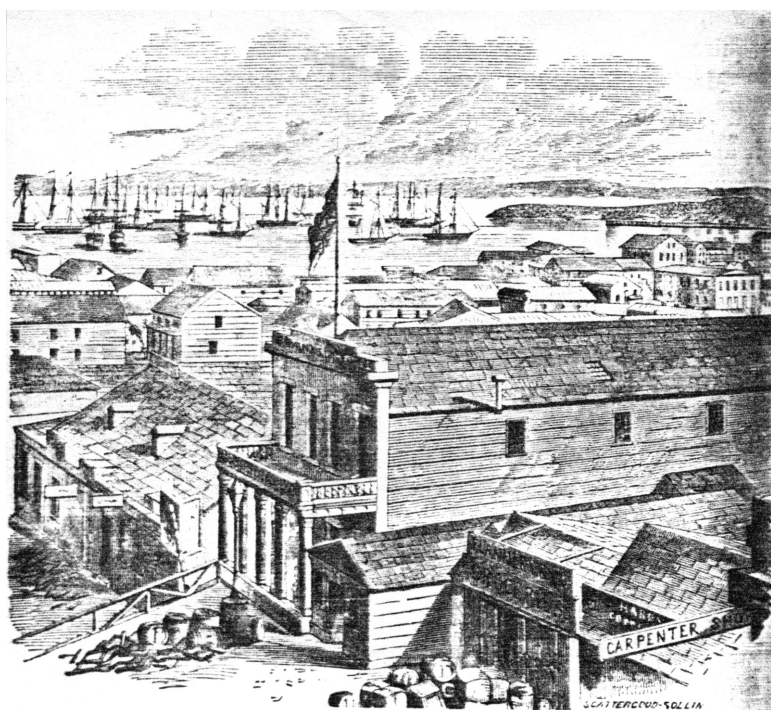
漂民らは身なりをきちんとととのえた。

午後三時ごろ、一人の水夫が陸地が見える、といったので、船長は望遠鏡をたずさえ上甲板のうえに立った。およそ六ッ時（七時）ごろ港口に達したとき、二本マストの水先案内船がやってきた。

九ッ時（十二時）ごろ、港の奥にある船着場——テレグラフの丘——に達したので碇をおろした。ほどなく税関の役人と水夫ら十名ほどがやって来て、積荷を改めた。それがすむと残ったひとりと船長が何やら話していた。漂民の身の上について話しているようであった。やがて留守番の乗組員を一人だけ残して、オークランド号の全員が上陸した。

午後になると、ボートが一隻やってきた。それには役所の二人の水夫（荷揚げ人）が乗っており、漂民に上陸をすすめたが、かれらの容貌が恐ろしくであったために、はじめだれもそれに応じなかった。しかし、三人ほどが水夫にともなわれて上陸した。

かれらは街中を見物したが、その繁栄と混雑ぶりに目をみはった。当時のサンフランシ



1850年当時のサンフランシスコ港の図。

スコの人口は、二五〇〇〇人から三万人ほどであった。当地は不ぞろいの丘陵の地であるが、徐々に地ならしをされ、テントや小屋に代わる家が建造されつつあった。かれらは菓子やパンなどをもらって船に帰ってくると、町のようすや案内役の水夫らの親切ぶりについて仲間に語った。

漂民の大半は上陸もせず、四、五日をすごすのであるが、サンフランシスコに入港した翌二十四日——彦太郎は、副長や船主に連れられて上陸すると、市中を見物し、やがて酒場に入った。すると船主らは酒のみはじめた。彦太郎はパイというものを食べたが、その味はとてもよかった。酒場で異国の女性をはじめて見た。

港には倉庫船というものがある。老朽化した船を倉庫がわりに用いるものであり、荷を積んで港内にとどめておくのである。

その倉庫船の持主が、夜五ッ時（八時）ごろに、漂民らを誘い、カルネー街の二階建ての大きな旅館のような所に連れていった。二階は舞台、一階は客があつまって飲食する部屋になっていた。踊りがはじまるまえ、倉庫船の持主がいすにすわるようにいった。和服を着た漂民の中には見せものにされることを嫌った者もいたが、死ぬべきところを救われたのだから

見せものにされることをいやがることはない、という者もいた。

やがてカーテンが引きあげられると、大勢の見物人が客席におり、日本人を珍しくおもった。観客は漂民に近づくと手をにぎったり、タバコや指輪や菓子類やら貨幣などを思い思いにあたえた。そのあと仮装舞踏会がおこなわれた。

その後、十日ほどすると、オークランド号の積荷は倉庫船に移された。

船主は日本人にむかって、そこもとは三日ほどすると、他の艦に移される、と手まねで伝えた。オークランド号はふたたび航途に上るために、

日本漂流民は税関長キングの監督のもとに置かれた。かれは日本人の処遇をワシントンの米政府へたずねると、税関の船に居住させ、じゅうぶんの保護をあたえるように命じられた。

米政府は日本人がアメリカ船に救助されたことを奇貨（えがたい利益）とみなし、軍艦にて日本に送り還し、同国と和親条約をむすぶきっかけにしようと考えた。この間、ペリー提督の日本遠征隊は、着々と準備をととのえつつあった。

船を乗り換える前日、オークランド号の船長は、漂流民らを甲板のうえに集めると、本船はちかく出帆するが、これからは税関当局がそこまの世話をするとつげ、税関用の艦に乗りうつるため、荷物の用意をするようにいった。

翌日の午後——二隻のボートが、日本人を受けとるためにやってきた。十七名の漂流民はそれに乗った。別れに際して、漂流民らは船長をはじめ乗組員一同に、航海ちゅうのひとかたならぬ厚情を謝し、さよならをいって別離の情をおしんだ。

各ボートには、士官一名と五名の水夫が乗っていた。士官は金筋の入った帽子をかぶり、腰にサーベルをぶらさげていた。

新たに移乗を命じられた艦は、港防禦の三本マストの鉄製の密輸監視艦（レフイニニューカッター六〇〇トン）であり、艦名を「ポーク」といった。備砲は六門、搭乗員は五、六十名、うち九名は士官であった。そのうち主なる士官は、左記のような人びとである。

艦長……………ハンター

（職階不詳）

糧食係……………トーマス・トロイ（一等衛生兵伍長）

（日本大尉）

？……………トンブソン

（大尉、職掌不詳）

このほか士官、主計、医官、コック、ボーイなどが乗っていた。士官は金筋入りの帽子をかぶり、金ボタンのついた衣服を着、いかめしい動作をしていた。

糧食係のトロイは、艦長より日本人の世話掛を命じられた。かれはヒゲもじゃの大男であり、見かけとはちがって親切な男であった。食事や衣服のことはいうに及ばず、すべての点で日本人を手厚く扱った。漂流民らは、ポーク号（おそらく米国十一代大統領ジェームズ・ノックス・ポーク「James Knox Polk」一七九五―一八四九、一八四五―四九在任）から、その名を採ったものであろう）に移った翌日、金ボタンのついた金色が

かった上衣とズボンをあたえられると、アメリカの役人になったような気がし、上陸のときみな得意気にその制服を着た。

かれらがポーク号に移乗した直後のことか、ボルチモアの写真家ハーベイ・R・マークスによって銀版写真シルバータイプに撮られ、一八五三年一月二十二日付の『さし絵入りニュース』(Illustrated News)は、その写真をもとにおこした木版画(三葉)を掲載した。木版画はフランク・レスリーの製作によるものであり、全員和服を着、すわっている画である。

なお、漂民らは一人につき四枚写真をとられ、三枚は役所へ納め、のこり一枚を土産としてあたえられたという(利七漂流記談)。

かれらは、なすこともなく日夜、船中に留めおかれているだけであるから、日を経るにしたがって退屈をおぼえるようになった。若いものは船の水夫のしごとを助け、高恩の万分の一をもむくいようとの評議にたち、その旨を日本人掛のトーマス・トロローイに計った。トロローイはさらにこの旨を艦長に伝え、艦長も大いによろこび、さっそく承知した。

やがて士官室で働くもの、甲板で水夫のしごとを手伝うもの、艦長のボーイとなるものが現れた。彦太郎は、艦をおりたボーイの後任となり、かいがいしく働いたから、艦長から目をかけられ、ときどき物をもらうときがあった。

日本人掛のトロローイは、地理書やフランシスコ・ザビエルに関する書をよんだことから日本に関心があり、彦太郎などとはときに日本語をおしえてやった。ある日のこと、トロローイは読本リーディングを、トンプソン大尉はつづり字読本をもって来て、漂民に英語をおしえはじめた。が、年寄り(船頭・万蔵?)は、みなが英語を学ぶことを好まず、苦言を呈した。

かれはいった。

——一日も早く日本へ帰るつもりなら、外国のことを学ぶべきではない。鎖国下の日本では、外国のことを知ったり、外国語を口にするものは、たちまち牢獄につながれるほどである。国に帰れても、すぐ入牢の身であるから、外国のことを学んだことがわかったら、難儀にあうこと必定である。

彦太郎は、ポーク号に在る間にだんだんと言葉をおぼえ、たいていの用をはたせるようになっていたから、この旨をトロローイとトンプソンに告げ、その後英語の学習は中止になった。

船中での漂民らは、日曜日になると外出を許可され、そのつど市街をあるいた。ある日のこと、丘のうえに一軒の荒れた家をつつけたので中をのぞくと、そこは屠殺場であった。メキシコ人が家畜を屠ころっていた。一同、家畜の悲鳴を聞くと、目をとじ、耳をふさぎ、その場から逃げ帰った。



ポーク号にること約十二ヵ月——明けて嘉永五年（一八五二）二月、港のむこうの川岸に、大きな合衆国の軍艦がやってきて碇（いかり）をおろした。ポーク号の艦長はその艦を指さし、みなを送りかえす艦であるといった。これを聞いて一同大いによろこび、故郷への土産にと取っておいたガラス製の空びんなどをあつめ、荷造りをはじめた。

漂民を日本へ送還するための軍艦は、「セント・メアリー」号といった。三本マストの同艦は備号二十二門、乗組員の数は百数十名。ポーク号の倍もあるような艦であった。

三月十一日、セント・メアリー号より迎えるのボートが二隻、ポーク号にやってきた。移乗に先だって、漂民ら十七名に、ポーク号の艦長より寝具（毛布、敷フトン）や衣服（洋服や下着）、食器やナイフ、フォーク、食物（パン、ハチミツ、茶、砂糖、塩、酢など一週間分）などがあたえられた。

ポーク号の艦長、士官、水夫らがあつまり、漂民らをたすけ、荷物をボートに積み入れた。別れにのぞみ艦長は、日本人の手をにぎりしめ、名残りをおしんだ。無事に帰国したら、かならずその安否を手紙で知らせるよういった。かれは眼になみだをいっばいためていた。それはじつに感傷的な別離の光景であった。

三月十一日の午前七時ごろ——日本漂民をのせたセント・メアリー号は、総員甲板にでて手をふるポーク号のそばを通り、金門湾（サンフランシスコ湾と太平洋をつなぐ海峡）を通過した。水先案内船と別れた艦は、ハワイ諸島にむけて疾走した。

奥の部屋から出てきたセント・メアリー号の艦長は、漂民のひとり（彦太郎のちのジョセフ彦か？）にむかい、English speaking, Sir? と問えば、No, Sir. といった答が返ってきた。

サンフランシスコを出帆して十日余り、まったく山を見ず、十七日目にはじめて島をみた。過去六ヵ月ほど、船医の診察をうけていた船頭の方歳（六十三歳）は、一八五二年四月三日（嘉永五年閏二月十四日）の朝、洋上で病死した。艦はこの日の夕方——ハワイ島のヒロに入港し、十日間滞留した。

艦長は万歳の葬儀をいとなむつもりであったので、漂民に日本の葬り方をたずねた。棺に入れて葬る、と答えると、大工に命じて棺をつくらせ万歳の体をきよめ、ヒゲをそり、新しい衣服を着せて納棺した。万歳の棺を山に葬ろうとするが、山へ登る道もないので島民に道をひらいてもらい、本道から二十町（約二キロ）ほど行った山奥のうえに穴を掘り、そこに埋葬し、大きな石を墓標とした。



左から民蔵（26歳）、彦太郎（15歳）、万蔵（60歳）、治作（27歳）

墓<sup>しるし</sup>の印木に「南無阿彌陀佛 日本万蔵」と記し、その左右に年号月日を書き入れた。墓碑に日本文字を書いたのは、賄方・喜代蔵であった（「播州人米国漂流妹末」）。鳥民も日本人を見物するために大勢やってきた。

葬儀の帰途、ヒロの町をあるいて見物した。戸数は多くなく、住民の多くは小屋のような家に住んでいた。土地は肥え、野生の莫実は豊富にあるし、沿岸では魚類もたくさんとれた。

やがて艦は、香港へむけて出帆し、同地には一八五二年五月二十日（嘉永五年四月二日）に到着し、二泊碇泊したのちマカオにむかい、東洋艦隊の旗艦サスケハナ号（オーリック提督が座乗する外輪蒸気艦）をみた。この間、サスケハナの提督および幕僚らは、セント・メアリー号に來艦すると、彦太郎らがいる部屋にやって来て、サンフランシスコから付き添ってきたトーマス・トロローイを通訳とし、いろいろたずねた。

アメリカ側は、漂流十六名をペリー艦隊とともに日本に送還するつもりであったが、同艦隊はまだ香港に來ていないので、やむなく一行をサスケハナ号に移すことになった。セント・メアリー号は、日本漂流民をサスケハナに移乗させると、土人による米人虐殺の談判をするためにフィジー島（南太平洋にある）へむかった。

マカオに碇泊ちゅう、漂流民らは街中を見学したが、道路も家屋も石でできており、豊かな町の印象をえた。

セント・メアリー号の士卒らと別れた漂流民らは、サスケハナ号に乗り移ったが、下甲板のブタ小屋にもおとるきゅうくつかつ不快な部屋に入れられた。艦内は暑いうえに、乗組員は粗暴であり、不親切であった。米つぶは一度も出ないし、水夫とおなじ食事を出された。暑さのため、甲板に出て眠っている水夫のそばで涼をとっていると、士官から足蹴にされたりした。付きそいのトロローイにそのわけをたずねると、中国人の扱いにならって、無礼粗暴なのであろうという。

サスケハナ号は、ふたたび香港にもどった。ある日の夕方のこと、漂流民らが食事をしていると、洋服を着た東洋人がやってきた。その男は、思



いがけなく日本語で、おまえ方は日本の人なるよし、日本はいずこの国の人か、とたずねた。

突然の同胞の来訪にみなおどろき、すぐ返事に窮してしまった。そのとき相手の男は、——そんなにたまげることはなかばい。それがしは肥前ひぜん前嶋くものつ口之津（長崎県——島原半島南端の港町）の生まれで、力松ともうす者である。といった。

同人の話によると、肥後ひご（熊本県を占める旧国名）川尻村の船頭・庄蔵の船にのり、おなじく肥後の国の利三郎という者と三人で、天保五年（一八三四）の秋——サツマイモを積んで肥後より長崎にむかう途中——台風にあい、四十日ばかり漂流したのち、フィリピンの一島にたどり着いた。

このとき、島民に船もろとも衣服まで奪われてしまった。が、めいめいかれらのいそうろうになった。あるとき力松らは、手まねによって故郷へ帰りたい、といった気持をつたえろと、島民は胸にかけている十字架を指さし、これを拝めば送り返すといった。そこで三人の漂流民は、その十字架をおがむと、相手は大いによろこび、うなずいた。

その後、大勢の力をかりて大木を打ちたおすと、二ヵ月ほどかかって船の形にした。島民四人とともに力松らは漂着した小島を出発し、小島づたいに数ヵ月かかってマニラにたどり着いた。そしてマニラから船でマカオに送られた。このときマカオには、尾州の漂流民——乙吉、岩吉、久吉らがいた。マニラ人たちは、力松ら三人を、乙吉らがやかいかいになっている親方（じつはギョウラフ師）の家の門前で置きすてて帰って行った。力松は話をつづけた。おまえ方のことは、一昨年よりうわさに聞いていた。きょうは役用で来艦したが、あすにでもわが住居をたずねられたらよい、という立ち去った。

あとで一同あつまると、世にもふしぎなこともあるものだ、といって話しあった。日本におれば、人に会いたいとおもってもなかなか会えぬのに、異国で同胞に会えたのは神の引き合わせであろうといった。

翌日（日曜日）、艦長の下船許可をえて、力松をたずねることにした。だれも唐土のことば（広東語）がわからず、あっちに行ったりこっちに來たりしているうちに、イギリス人らしき老人がいたので、その者をつかまえて三番館サンバースリー・ハウスをたずねると、その家を知っていた。力松の家は、関帝（？）二二九年、三国時代の蜀の武將）をまつる神社のとなりにあった。折あしく力松は、主人の家敷に行っていて留守であったが、力松の女房に屋内に招かれ、すぐ手紙をしたためると夫のもとに遣った。

しばらくすると、使いの者が帰ってきて、力松の口上をつたえた。かれの主人の家で会いたいから、こちらに来てくれという。そこで皆いっし

よにその家に行くと、力松が門の外にでて待っていた。一同はただちに屋内にみちびかれ、二階に通された。力松の主人というのはイギリス女性（後家）であった。

一同いろいろもてなしを受けたが、女主人はいった。ながい漂流のはてに、無事くらしていることはめでたいことである。この力松も日本人なれば、いろいろ話もあるにちがいありません。わたしも漂流談を聞きたいが、話のじまになるから退室します。みなさんはとくどくつろいで話をされたらよい。

力松はふたたび漂流のてんまつや、尾張の漂民・音吉が商船モリソン号で帰国しようとしたとき、撃ち払われたことなどを話した。またそこもとたちは承知していないかもしれないが、アメリカは近々日本との交易の口をひらこうとしている。日本は神国であり、外国との交通・貿易を禁じている。われわれが先年、商船で行ってさえも撃ち払われるといった憂目をみた。

いま軍船（艦）で送還されても、受けとってもらえるかどうか心もとない。無理して帰国して、危い目にあうより、当地にとどまったほうがよい。もしとどまる気があるのなら、いまよりこの家に残り、米艦にその旨をつたえればよい。何もむずかしいことはない。よく考えて返事されよう。力松のことを皆うつむいて聞いていたが、そのとき利七は、いまとどまるにせよ、帰国の途をえらぶにせよ、すぐきめることはできない。ひとまず帰艦して、みなでよく相談したのち返事したい、といった。そのあと皆々あいさつをそこそこにして帰った。

サスケハナ号に戻った漂民らは、去就（きょしゅう）を決する相談をした結果、ひとりとして異国に留まりたいという者はいなかった。当地に永住することは、御公儀（幕府）や六十余州の神々にそむくことになる。漂流ちゅうに命をたすかったのも神々の冥佑（めいゆう）（たすけ）である。その恩をわすれ、この地にとどまり、キリシタン宗門にでも入れば、おそろしい天罰があるにちがいない。日本へ帰るほかない。力松の言動には注意せねばならぬ。

かくして衆議は一決し、一同そのままサスケハナ号にとどまることになった。

その後、サスケハナ号は、日本漂民をのせたまま、交易の状態をみるために、香港の西方——広東から二里ほど川下に位置する、ホアンブ黄埔（*Whampoa* 又は *Hoang-pou*）に赴き、ついでシアン廈門（アモイ——福建省南部の港）にむかった。この港町におもむいたのは、アメリカ商船の乗組員であった清国人が海賊と手をくみ、船長や乗組員を殺した事件を処理するためであった。のちこのアメリカ商船は、イギリス軍艦の協力をえて、犯人二十七名をとらえ、広東政府に引きわたし、刑を執行させた。

サスケハナ号は、ふたたび香港にもどった。

漂民らは、帰国の手がかりもなく、毎日もんもんと米艦のなかでくらし。ときどき上陸すると、神社に参詣し、帰国できるよう祈ったり、力松の漂流仲間である庄蔵宅（力松のとなり）をおとずれたりした。

あるとき神社に参ったとき、宮司（ミヤジ）のような人物と筆談によって話す機会があり、その折身のうえ話をしたところ、親切にも帰国の世話を申しでた。

同人によると――まず香港より広東（クワンtung）——廣州（カンチウ）「華南中部の港町」の意でいったものか）に行くべしという。広東へは陸路で二十里ほど。そこに着いたら南京（江蘇省の省都）まで送り届けるよう手配しよう。さらに南京より乍浦（ツァー）という所まで送り届けるようにします。乍浦から長崎へは船の往来があるから、無事帰国できるはずです、といった。

皆々、宮司がことこまかに語る話に大いによろこび、足ばやに帰艦して相談すると、意見は二つにわかれた。すなわち艦に残るものと、帰国の途をえらぶものと。翌朝、艦長へはきょうは日本の祭日なので上陸して酒宴をひらきたい。あさって定られた時刻までもどるつもりです、といて、とりあえず全員艦をおり、その夜は庄蔵宅に一晚世話になった。

庄蔵は、力松とおなじようにイギリス人の屋敷に勤めていたが、このときは人夫十名ばかり連れてアメリカのカリフォルニアに出かせぎに出ていた（おそらく砂金を採るためか）。夫は留守であったが、庄蔵の女房は親切な人間であり、みなめんどろをみた。

十六名のうち七名は、サスケハナ号に残り、利七ら九名は出奔することに決した。

その翌日（嘉永五年「一八五二」六月下旬）――残留する七名に見送られて、九名のものは、香港島から八町ほどの海峡を渡し舟でわたり、対岸の九龍半島にいたった。そこから山道を二里ばかり進んだとき、手には銃を、腰に剣をおびた六十名ほどの男に道をふさがれた。かれらは一人に五、六名づつかかり、剣を抜いて漂民らの胸先にあて、金品を要求した。拒絶すると刺し殺しかねなかったので、やむなく追はぎどもに荷をわたした。

その中には、金品・衣類・土産・珍物のほか、宮司からもらった紹介状、サンフランシスコで撮ってもらった写真や懐中時計なども入っていた。山賊どもは、さらに漂民らの衣服までぎとったのち逃亡した。

ここに至って九名は途方にくれ、下着すがたのまま香港に帰るしかなかった。さいわい船着き場に知り合いの清国人がいたので、その者にことしのしだい話をすると、気の毒がり、その晩は衣服などを借り、その者の船のなかで休んだ。

サスケハナ号に残った七人に、委細を伝える手紙をだし、衣類をもってくるよう依頼した。艦長らには遊女に衣服や金銀のすべてをやったようにいい、そしらに顔で艦にもどった。

七月のはじめ、サスケハナ号は用務をはたすために、南南西の方角に位置する金門島（福建省南部——厦門の前面）におもむき、そこに六十日ほど——十月ごろまで逗留した。

金門島に碇泊ちゅう、サンフランシスコから日本漂民につき添ってきたトロイは、ペリー艦隊の到着がおそいことに倦みつかれていた。かれはカリフォルニアの金鉱熱が去らぬうちに一もうけしたいと思っていた。そのためには、軍務からはなれねばならぬが、彦太郎にいっしょにアメリカに帰らないかといった。アメリカに行けば英語をじゅうぶん学べるし、二、三年もすれば日本も開国するだろうから、そのときはわたしといっしょに日本を訪れることができる。外国語に通じ、その国の知識をうることは、じぶんひとりのためばかりか、日本政府のためにもなることだとさとした。

しかし、彦太郎はまだその辺の利害がわかるほど齢をとってはおらず、ましてや同国人とわかれて行くことに心細さを感じた。トロイは、もし日本人の連れがあればアメリカに行くかと、たたみかけて問うと、彦太郎は大いによろこび、それならば考えてもよいといった。そこで彦太郎は、一行のなかでも若い部類に入る亀蔵（二十四歳？）をえらぶと、そばにいた治作（二十九歳）も、いっしょに行きたいといったので、トロイは快くこれを許した。

その後、サスケハナ号は、香港にもどり、十一月中ごろまでそこに滞泊した。ついで同艦がマカオに寄ったとき、オーリック提督の許可をえて、四人（トロイ、彦太郎、亀蔵、治作）は艦をおり、ボートに乗り移った。仲間割れをきらう者たちは、行かないように引きとめようとした。が、四人はそれ振り切り、ボートをこぎだし、やがてマカオに上陸した。

ポルトガル人のフランクという者のホテルに投宿した。宿の主人は好人物であり、よくめんどろをみてくれた。その後、船で香港に出ると、経費を節約するためにアメリカ人が経営する安ホテルに泊った。トロイから話をきいた主人は、日本漂民の不幸をあわれみ、たいそう親切に世話をした。一週間ほど滞在するうちに、イギリスの老朽船「サラフパー」号（四〇〇トン）がサンフランシスコにむかうことを新聞で知り、ひとり五〇ドルの船賃を払って乗った。

サラフパー号は、オンボロ船である。船あしはのろいばかりか、船室も下等である。この船の航路は日本の近海であると聞いていたので、彦

太郎は日本の陸地へ船をよせてほしい、とたのんだが、船は海上をいそぐために立ち寄ることはできなかった。

船は五〇日ほど航海したのち、一八五二年十二月上旬（嘉永五年十月）サンフランシスコに到着した。

トロローイは、着岸後、亀蔵と治作のしごとを見つけるために兩人をともない下船した。彦太郎は荷物の番をするため船にのこった。三時間ほどすると三人が帰ってきた。トロローイによると、税関船「フロリック」号とおとずれたら、旧知と会ったという。三人の漂流のことを話したら、みな大いによろこんでくれ、保護することの約束をとりつけたという。

のちに亀蔵と治作は、トロローイの世話で、つぎの船に雇われた。

亀蔵……………ベニシアの小帆船「アルゴス」号（船長ピース）に雇用され、月給七〇ドル。

治作……………測量船「エウィング」号に雇用され、月給六〇ドル。

トロローイもアルゴス号の食糧係に雇われ、警備伍長の給金を支給することを約され、手はじめに五〇ドルもらった。

彦太郎も、トロローイの世話ではじめ月給二五ドルでホテルのボーイとなったが、中国人コックの雑しごとでも手伝わされ、いや気がさしやめた。

つぎに紹介されたのは、ベニシアの町（サンフランシスコの北東約四〇キロ——カーキーネズ海峡にのぞむ）にある女主人が経営する下宿屋である。こここのしごとは楽であり、給料三〇ドルをもらった。そこは上流の人五、六人しかいない下宿屋であった。

あるときアルゴス号の船長は、南洋帰りのアメリカの果物運搬船に救助されたという日本人を連れてきた。その者は和服を着、腰に脇差しをおび、手にフロシキ包をかかえていた。

この者は、彦太郎らがアメリカ人とおなじ服装をし、頭髪もおなじであったから、日本人であることを知らなかった。ていねいにあいさつするだけで、一言もいわなかった。日本語で話しかけると、いぶかし気に目をひらき、やがてそこにひざまずくと、助けを請うた。彦太郎らは、米人に救助されたときのことを思い出し、その心根を察し、その男をなぐさめてやった。

その漂流民の名は、重太郎といった。千二百石積みなまの船の水主であり、新潟より箱館におもむき、ふたたび新潟に帰ろうと津軽海峡にさしかかったとき風となり、沖合に流された。やがて風が吹きはじめた。船は沿岸に寄ろうとするうちに舵がなまおれ、いかんともしがたく、風と浪に翻ろう

され、四ヵ月ちかく洋上の捨小舟となって漂流した。

積荷は塩魚ばかりであり、わずかの食糧も、日がたつにつれて食いつくした。十二名いた乗組員も、つぎつぎと病にたおれ、死んでいった。さいごに生き残ったのは重太郎ひとりであり、気をうしなっているところを果物運搬船に助けられたのである。

重太郎を救助した船の船長は、その処置について税関長サンダースに相談する必要があるから、彦太郎に通訳をたのんだ。

一八五三年六月二日（嘉永六年四月二十六日）——彦太郎は下宿屋の女主人に四、五日ひまをもらうと、アルゴス号の船長ピース、トロイー、重太郎といっしょにサンフランシスコの税関の一室にビバーリー・C・サンダースをたずねた。サンダースは、重太郎に遭難のてん末を聞きただすと、かれに衣服をあたえ、日本に帰る便宜あるまでアルゴス号にとどまるようにした。

彦太郎ら四人は、用事をすませて帰ろうとすると、サンダースはピース船長を呼びとめ、なにやら話をはじめた。そばで聞いていたトロイーは、税関長はきみを家に引きとって学校へあげたいといっている、といった。トロイーは、こんな好機会はまたとない、といった。彦太郎は、いまの主人がひまをくれれば、ご好意に甘んじるつもりです、というと、ピース船長はそれはきくと聞き入れてもらえるであろうといった。

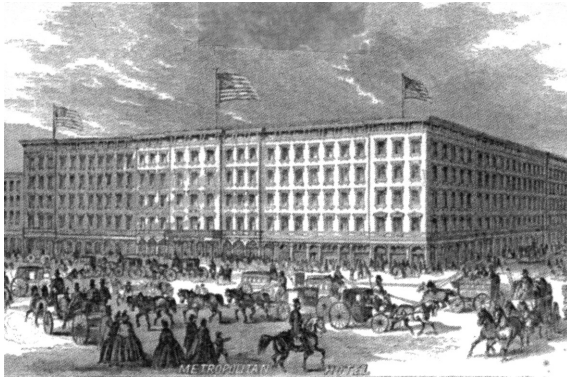
彦太郎は直ちに蒸気船にのり、ベニシアにもどると、女主人に仔細をなし、ひまを取りたい旨をつたえた。女主人は給金を四十五ドルまで増額するから、とどまるようにいった。彦太郎は、けっして給料が安いからやめるのではない。教育をうけるためにサンフランシスコの税関長のもとに行くのだというと、女主人もようやく納得し、願いどおりひまを出してくれた。

六月十五日——彦太郎は、ピース船長、トロイーにともなわれて税関長のもとに行き、この日より給仕となった。税関長のサンダースは、私立銀行を共同経営しており、毎日午後三時になると、馬車で税関（バッテリー街とワシントン街が交差する角に位置）を出ると銀行にむかった。そして四時半になると、ミッション街とカーネー街とが交差するところにある花園つきの邸宅に帰った。

七月中旬——サンダースと彦太郎は、サンフランシスコを出帆すると、サン・ファン・デル・スル（マナグアの南東一〇〇キロ、太平洋にのぞむ港町）に出、そこから蒸気船に乗りかえニューヨークへむかった。ニューヨークに到着したのは、一八五三年八月五日（嘉永六年七月一日）のことであり、「メトロポリタン・ホテル」に投宿した。

翌日の午前七時——列車でニューヨークを発し、夜九時ごろボルチモアに到着した。駅にサンダースの義弟が馬車をもって出迎え、直ちに邸宅に行くと、遠来の孤客ということで家族から歓迎された。





ニューヨークの「メトロポリタン・ホテル」

一週間ほどすると、サンダースはワシントンにおいて用事があり、彦太郎をともなった。二人はフロックコートに身をつつみ、二頭立の馬車でベンシルベニア通りを進み、やがて白亜の宏壮な建物に着くと、

「合衆国民の首長」

と称される人物と会った。が、彦太郎にはこれはどういう人なのかわからなかった。

黒服を着て、イスにすわっていたこの人物こそ、アメリカ第十四代大統領フランクリン・ピアース（一八〇四〜六九、一八五三〜五七在位）であった。

サンダースは、ピアースと握手したのち、彦太郎を日本から来たものである、と紹介した。ピアースは彦太郎の手をにぎったのち、イスにすわるようにいったが、ていねいにおじぎをして立っていた。大統領とサンダースは、対談をはじめたので、彦太郎は窓ぎわに行き、ポトマック川の風景をながめつつ考えごとをした。

一八五四年一月十七日、サンダースは商用でロシアにおもむくことになったが、出発に先だって彦太郎はカトリック系のミッション・スクール（「カルバート・カレッジ」マルベルク街）に入学し、<sup>(1)</sup>ここで綴字・習字・算術・聖書などをまなびはじめたが、教師も学友も親切におしえてくれた。

同年十月三十日、彦太郎はサンダース夫人にともなわれ「聖母被昇天大聖堂」(Cathedral of the Assumption B. V. M. のちの *Roman Catholic Cathedral*) におもむくと、小室にみちびかれた。そこで神父から、神の存在や信仰のことをたずねられたのち、いろいろクリスチャンネームをあげ、この中から好きなものをえらべ、といわれた。彦太郎にはどれも同じように聞こえ、快いひびきのものはなかった。

神父がさいごに「ジョセフ」といったとき、耳に響いた感じがなんとなくよかったので、うなずくと、相手は先に礼拝堂に入り、ここにて洗礼の式をおこない、彦太郎はカトリック教徒となった。

洗礼証明書には、ヒコの名が Joseph Hico Don とあるという。<sup>(2)</sup>彦太郎は受礼のち、「興味ある人物」として『イブニング・スター』紙（一八五七・十一・三付）に紹介された。





彦太郎ことジョセフ＝ヒコ。

二ヵ月ほどすると、サンダースがロシアから帰ってきた。かれはロシアの水をカリフォルニアに持ってきて、炎暑払いに利用しようといった商談があつて、ボルチモアを留守にしていた。

彦太郎はサンダースとともにカリフォルニアに行くため、学校を退学した。

ニューヨークから船でパナマに出、十一月二十八日サンフランシスコに着くと、二週間目に一つの学校に入れられ、翌年の一月ごろまで修業した。彦太郎が学んだ学校とは、いかなる名のどのようなものであつたのか不明である。

折から商業界に金融恐慌がおこり、サンフランシスコの銀行の多くも破産した。杖とまたのむサンダースも不慮の大損をし、その銀行をとぎし、財産の処分をせねばならなかつた。彦太郎はこれ以上、サンダースの世話をうけるわけにはゆかず、学校を通うことをいったんやめた。が、知りあいに親切なひとがいて、その人の世話でさらに半年ほど学業をつづけたが、その人も破産したので、彦太郎はやむをえず永久に廃学した。

一八五六年四月五日、彦太郎はサンダースの世話で、各国の依託品をあつかうマコンドレー会社の商業見習いとなり、この会社に一年半ほどつとめた。

ある日のこと、ウィリアム・グウィンという名の上院議員が、サンダースやマコンドレー社の新主人ケリーに使いをおくり、彦太郎をワシントンに連れてゆきたいといった。一つには彦太郎を秘書として、また一つには政府に雇い入れてもらうためであるといった。この話の背景にあつたのは、ペリー提督が日本に渡航して、同国と和親交易をひらこうとしていたこと。彦太郎を日米両国の役にたてたいと思ったからである。

サンダースもケリーも、はじめ彦太郎を手ばなすことに反対であつたが、グウィンがたびたび切に求めるために、賛同した。

そこで同年九月二十日、彦太郎はグウィン上院議員とともにサンフランシスコを出帆し、十月七日にニューヨークに到着した。二人は直ちにメトロポリタン・ホテルに投宿した。ある朝のこと、グウィン夫人がひとりの男をとまってホテルにやってくると、彦太郎はその者といっしょにブロードウェーの仕立屋に行き、洋服をあつらえ、かつ靴を新調するようにいわれた。一週間ほどすると、彦太郎の来歴が当地の新聞に出るようになり、かれは世間の注意をひくようになった。

それからというもの、晩さん会に、あるいは夜会に招かれるようになり、流行児となった。

十一月二十五日、グウィンは彦太郎をとまうと、馬車で国務省を訪れ、國務大臣カッスに彦太郎を紹介した。ついでホワイトハウスをおとずれ、第十五代大統領ジェームズ・ブキャナン（一七九一―一八六八、一八五七―六一在任）にかれを引き合わせた。彦太郎は合衆国大統領と会うのが、これで二度目であるが、ブキャナンはこの日本人といたしく握手をした。

グウィンは彦太郎を米国大統領官邸につれてきたのは、かれを国務省に雇ってもらうためであった。グウィンはいった。この日本人が早くアメリカ事情や政体のことを知れば、いづれ開国する日本と合衆国の和親にも利益がある、と。

これにたいして大統領は、わたしも同感だ、といった。しかし、国務省の職員の空位については、同省に照会されよ。もし空席があれば、すぐかれを任命してもよい、といった。グウィンは、先刻国務省をおとずれたとき、空席はない、といわれた。大統領閣下の恩命によって、とくべつの地位をあたえてほしい、というと、大統領は、ひとつのために官はつくれない、といって断わった。

けっきょく、彦太郎の就職の件は、さたやみとなった。そこで彦太郎は、グウィンのいそうろうとなり、日々本をよんですごしたが、アメリカの法律の概要をも勉強した。

彦太郎は、翌一八五八年二月まで、グウィン邸の食客となつてすごし、晩さん会や夜会に顔をだすうちに海軍大尉ジョン・M・ブルック（一八二六―？）と知りあいになり、したしく交際するようになった。ブルックは天文・測量・航海術に秀いで、水路や海底調査の専門家であった。

ブルックは、中国や日本沿岸を巡航し、その暗礁の存在をたしかめることを計画し、奔走ちゅうであつた。かれはもし調査のための遠洋航海に出ることがあれば、きみを雇い入れ、日本に帰国できるようにする、と約束してくれた。

国務省の就職の件がおながれとなったので、彦太郎は、ひまをえたいとグウィンに切りだした。ボルチモアには知己友人も多いので、同地に行きたい、という、と、ボルチモアの税関長宛の紹介状をかくてくれたのはよいが、給金の精算において支払いがよいとはいえなかった。

前年の九月五日より翌年の二月までの約五ヵ月分の給料は、月三〇ドルとして――約一五〇ドル。内金として五五ドル受けとったから、残金は――九五ドルのはずだが、ニューヨークであつた洋服の分七五ドルを差し引かれたため、二〇ドルしかもらえなかった。それもボルチモアへの旅費を出してほしい、といって、はじめて給金を精算してくれた。このグウィンという上院議員は、食わせ者であつたようだ。

ともあれ彦太郎は、ボルチモアに着くと、税関長をたずねグウィンの紹介状をしめたが、いま税関に空きがない、という。それよりサンダースの本邸をたずね、ふたたび食客となった。サンダースは、五月雨きつめがふるころ、カリフォルニアにおける残務を整理して、ボルチモアに帰つてき

た。ひさびさの再会、大いによこんでくれた。

サンダースの家では、部屋代と食費は不要であっても、身のまわりの雑費は払わなくてはならず、小遣いは二ドルを余すのみとなり、心ぼそくだった。

五月雨のうっとうしさを気にしないで暮しているうちに、六月一日となった。

この日ブルック海軍大尉から手紙がきた。文面には、中国と日本近海の測量のため近々出帆することになった、とあった。約束どおり貴殿を書記に雇い、本国に送りかえすよう取り計らうつもりである、とあった。

支払いをすませ、旅装をととのえる金がなかったので、マコンドレー社のケリーの実父（ボストン在住）に借金の申し入れをしたら、快く貸してくれ、小切手を送ってきた。

彦太郎は、ボルチモアを去るにあたって、サンダースの勧めもあって、合衆国民となった。いま日本は物情騒然となっているから、アメリカ人として行くほうが得策であろう、というのがサンダースの意見であった。

彦太郎は、ボルチモアの地方裁判所に出かけると、

判事    ギル

書記    スパイサー

らが署名せる帰化証明書をえた。

かれが帰化したのは、一八五八年六月三十日（安政五年五月二十日）である。

帰化証明書には、彦太郎の生年月日・住所・保証人などは記されていないという。<sup>(3)</sup> 受礼から帰化するまで、満三年七ヵ月たったことになる。

また海軍大臣の命を奉じたブルック海軍大尉から、艦長付の書記に任命され、七月五日発の郵船にてニューヨークを発し、サンフランシスコに来るべし、との辞令（六月十六日付）をうけとった。

サンフランシスコにむけて発つにはまだ時間的余裕があったので、彦太郎はしたい友人らと会ってすごした。七月になると、出発の日が迫った。連日、ボルチモアの友人たちが晩さんやお茶に招待してくれた。

七月三日の午後四時半——汽車が出る時刻がちかづいたので、サンダースの家族に長々世話になった礼をのべた。サンダースだけは、ボルチモ

アの駅舎まで彦太郎に同行し、車中において密封した手紙をわたした。

五時に汽車がうごきだすと、サンダースは彦太郎の手をにぎり、「神よ、この少年の前途に幸多かれ」といった。そしてプラットフォームに降りると、車窓をのぞき込んだ。かれはじっと立ったまま、汽車がみえなくなるまで手をふっていた。ボルチモアの古き街は、煙雨のなかにかくれていた。……

彦太郎はサンダースから渡された手紙の封を切った。それには読むものに深い感動をあたえる、飾りのない文章がつづられていた。

その内容の骨子は、――

恐慌のために身代がかたむき、君の保護と教育を継続させることができず悩み苦しんだこと。グウィン上院議員のことばを信じ、会社をやめさせたことは、わたしの浅慮であったこと。このたび合衆国海軍の測量船の書記となって日本へむかうよし、こんにちの発達をひじょうによるこぶものであること。

君を知って五、六年になるが、君はつねに正直、忠勤、ていねい、上品、かつ伶俐（れいり）（かしこい）であり、ひとの信頼が厚かった。別れることは忍びがたいが、君のしあわせと繁栄を期す。望むらくは自愛せよ……（一八五八・七・二付）。

彦太郎はこの手紙をよんで、感涙にむせんだ。サンダースは、誠実にして厚情のひとつであった。

ボルチモアを発して翌朝――午前三時にニューヨークに到着した。すぐメトロポリタン・ホテルに旅装を解き、朝食をとったのち、税関にブルック艦長の弟ジョン・ブルックをたずねた。

おもむろにあいさつをした。このとき彦太郎は、旅費として米国政府から三〇〇ドル給せられた。当時、サンフランシスコまでの船賃は、

一等……………三〇〇ドル

二等……………二〇〇ドル

三等……………一五〇ドル

であった。彦太郎は二等で行き、のこり一〇〇ドルを雑費にあてるつもりであった。

七月六日——ジョン・ブルックの見送りをうけ、彦太郎は「モセス・テラー」号に乗船した。同船の船長マックゴウアンは、かつて密輸監視艦ポーク号の副長だったひとであり、彦太郎のすがたを見て、君はヒコではないか、と声をかけた。彦太郎はこの船長のおかげで、上等客の待遇をうけることができ、船がアスピンウォール（パナマ中西部の港町——のちのコロン）に着くまで快適な船旅をたのしむことができた。

同港からパナマまでの六六キロは、鉄道でゆかねばならなかった。

彦太郎は、パナマで「リノラ」号に船を乗りかえ、七月二十九日にサンフランシスコに到着した。ブルック艦長の「フェニモア・クーパー」号は、メーア島で艀装ちゅうであったので、サンフランシスコで待つようにといった伝言があった。

またイギリス船「カリビアン」号が、十二名の日本漂流民を救助し、着港した、といったニュースを新聞で知ったので、面会してみると、尾州知多半島半田村の永栄丸の乗組員であった。漂流民らは、みなことばが通じるのでよろこんだ。ひとえに帰国のことをいうので、船長に会って一同を帰国させてほしいという、快く請けあった。

同船は日本人を乗せたまま香港にむかい、のち長崎まで送り届けたという。

フェニモア・クーパー号は、もともとニューヨークの水先案内船であったが、数年前に政府が買いあげ、こんど測量船に改造した。二本マストのスクーネル型の小艦（九六トン）であった。乗組員は、艦長をふくめて十七名。二ヵ月分の食糧と水をつみ込んでおり、吃水線はふかく沈んでいた。

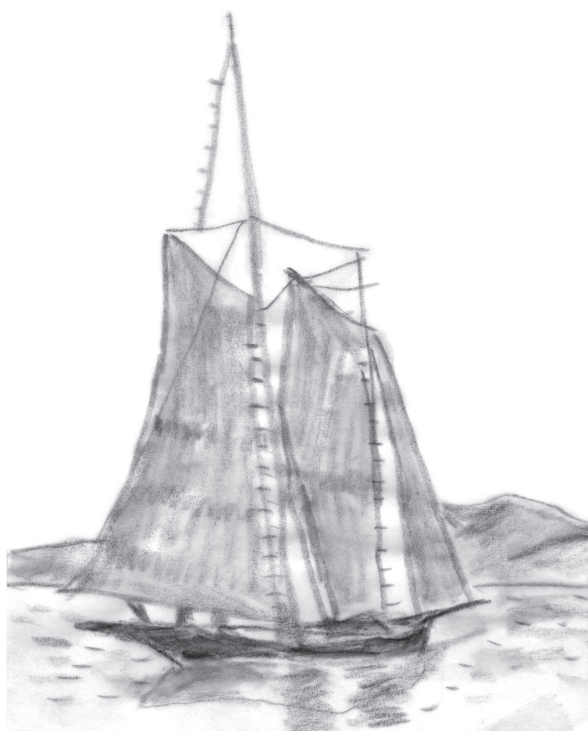
彦太郎は、この艦に迎えられた。

六月二十六日の午前十一時——サンフランシスコを出帆し、一路ハワイ諸島のオアフ島を目ざした。が、海底を測量しながら航海をつづけていたので、ホノルル港に着くまで四十三日も要した。

十一月九日（安政五年十月四日）、フェニモア・クーパー号はホノルルの沖に到着した。が、水先案内船がくるまですぐ入港できなかった。順番をまつ捕鯨船が多かったからである。内港にフランスのフリゲート艦ユリディス号、イギリスのフリゲート艦カリプソ号が碇泊していた。<sup>(4)</sup>そのほか、英米の捕鯨船五十二隻が入港していた。

投錨してほどなくすると、ハワイ王国の高官や新聞記者、英仏の海軍士官がおとずれ、着港を祝した。

フェニモア・クーパー号は、五十日ちかくホノルルに滞泊した。この間に彦太郎はふたたび上陸すると、ホノルル市街を散歩した。一八四〇



測量船フェニモーア・クーパー号の図。

年代——家屋のほとんどはかやぶき屋根でできていたが、一八五〇年代に入ると、木造家屋に取って代わられた。道路も整備され、幅広のまっすぐな道になった。どの家も小さな花園をそなえていた。<sup>(5)</sup>

十一月二十日——彦太郎は朝食をすませたのち、ホノルル市街を散歩した。それより艦にもどると、見学したことを報告した。そのとき、ブルック艦長は、聞くところによると、アメリカの捕鯨船に救助された日本人がこの港に來ている、といった。

そこでボートを借りて沖に碇泊ちゅうのホボマック号を訪れると、日本人が二名（氏名不詳）のっていた。その者から話を聞くと、遭難したのは二年前のことであり、尾州（<sup>びしゅう</sup>愛知県）と江戸のあいだを通う船にのっていたが、航海ちゅう大しけにあい、数ヶ月洋上を漂流した。やがて捕鯨船チャールズ・フィリピー号に救助された。

同船はやがてホボマック号と会うと、人手不足のため兩人はその雇いとなり、当地にやってきたといった。船中の待遇はどうであったかと問うと、皆から親切にされたという。国に帰りたいか、と聞くと、帰りたいが、なすすべを知らないし、もし方便があればおしえて欲しいといった。

そこで彦太郎は、ハワイ王国の司法長官A・B・ベーツと会い、事情をはなし、箱館ちかくまでゆく捕鯨船はないか問い合わせると、ゲデアン号という船があることがわかり、同船は日本人二名を送りどけることを承諾した。ついでベーツとともにホボマック号を訪れ、日本人解雇のことを申し入れ、船長の承諾をとりつけた。

その後数日すると、捕鯨船メアリー・ブレイザー号（船長・ラウンズ<sup>(6)</sup>）が入港した。同船には日本人がひとり乗っている、というので、彦太郎はさっそく会いに行った。阿波国（<sup>あわ</sup>徳島県）淡路<sup>あわじ</sup>の政吉（チムと呼ばれていた）というものが乗っていた。

同人の話によると、三人で紀州へむかって乗りだしたが、途中で嵐にあい、舵をこわし、進退の自由をうしない、漂流をつづけた。やが





政吉（アメリカ名：チム）

て食糧もつき、二人が斃れ、政吉じしんも幽明の境をさまよっていたとき、メアリー・ブレイザー号に救助されたという。

政吉は彦太郎と会ったとき、相手が合衆国海軍の制服を着ていたので恐れを感じたようであり、ひざまずいて話をした。が、彦太郎はわれもそこもと運命を同じくする者であり、いまは米国政府の艦で日本に帰るところである、といい、まず立ちたまえという、相手は勇気をえ、同行させてほしい、といった。彦太郎はクーパー号にもどると、ブルック艦長に事情をかたると、政吉を連れて来てほしい、といった。

そこで彦太郎は、すぐ捕鯨船をおとずれ、船長と会って政吉をすこしの間貸してほしい、といい、その承諾をうるや、ブルック艦長に会わせた。艦長に政吉の雇用の件をたのむと、一ヵ月十二ドルの給金で見習い水夫として雇い入れてほしい、といった。

彦太郎はブルックのことばを政吉につたえると、かれは狂喜した。

彦太郎は政吉とともにふたび捕鯨船にもどり、政吉の解雇を申し入れると、快く承諾してくれた。船長がいうにはかれはよく働き、船員からも愛されていた。ことばが不自由であるから、本人が望めばアメリカに帰帆したとき教育を受けさせたいと思っていた。が、いまの話では、帰国できるまたとない機会だから、故国へ帰るほうがよろしい、と親切に語った。政吉は翌日より、クーパー号の見習い水夫となった。

ブルック艦長は、政吉の働きぶりを称賛し、「チムの背は高くないが、がっしりとひきしまった体格をしており、よく働く。じつに役に立つ男だ」と、日誌にしている（一八五八・一二・三〇付）<sup>(7)</sup>。

後年、政吉は帰国を果たすと、阿州侯に召し出され、帯刀をゆるされ、「天毛政吉」の名字を賜わり、御船頭<sup>おふねがしら</sup>をつとめた。明治十年（一八七七）ころ、神戸において仕立て屋をひらいたという<sup>(8)</sup>。

ところで彦太郎の誤算は、船によわいことであった。ことにフェニモア・クーパー号は、小さい測量艦であったから、その動揺はげしく、かれは終始船酔いに苦しめられた。そのためかれはブルック艦長に辞職を願い出ると、艦長も快く承諾したので、艦をおりることにした。ブルック艦長は、早くから彦太郎が船によわいことを危惧していたようである。



——ジョセフ・ヒコは、船よいと運動不足に悩んでおり、当地滞泊ちゅう辞職を大まじめに望んだのでそれに応じることにした。

と日誌（一八五九・三・九付）にしている。

艦をおりるにあたって、東インド艦隊のタットヌル司令官宛の手紙をわたした。それにはヒコのために、日本に帰国できる便宜を図ってほしいとあった。ブルック艦長は、彦太郎を手渡ししたくなかったから、翻意をうながしたようだ。

——好人物のヒコと別れることは、ひじょうに残念なことであった。かれの決意のほどは固く、どんなに説得しても、艦にとどめることができなかった。（中略）いま艦にはチムという日本人がいる。かれは役に立つことだろう。かれを故郷の村まで運んでやるつもりだ。その故郷は、日本の本島にかい島である（一八五九・三・九付）

彦太郎がクーパー号をおりたのは、二つの理由からであった。一つは船よいのため。もう一つは、アメリカ領事館でみた新聞に、日米通商条約の締結と、新貿易港が三カ所七月からひらかれることが書かれていたからである。かれはこのニュースに驚喜し、これで天下晴れて故国の地をふめるとおもった。

クーパー号は、一八五九年三月九日ホノルルを出帆すると、進路を西南西にとり、ジョンストン島、コーンウォリス島（北太平洋ポリネシアに位置するアメリカ領。ホノルルの西南西一、一二九キロ）にむかい、同地域の浅洲や暗礁の調査をおこなった。

彦太郎は、香港または箱館まで行く便船がみつかるまで、ハンクスという人物の家にやっかいになった。やがて香港までゆく船がみつかった。一八五九年三月二十九日——彦太郎は、「シー・サー・ペント（大海蛇<sup>うみへび</sup>）」号（船長・ホワイトモア）という船にのりホノルルを発ち、二十三日をついやして同年四月二十二日の昼ごろ香港に到着した。かれは七年前の一八五二年（嘉永五年）五月にセント・メアリー号で香港に来ているが、この島は当時よりもにぎわっていた。

香港では、ホノルル王国の司法長官ベーツからの紹介状があったので、香港駐在のアメリカ合衆国海軍倉庫委員ス・ペイデンの家にやっかいにな

り、タットヌル提督を待つことにした。

シー・サーペント号は、香港に至るまえに広東に寄ったものか、このとき栄力丸に乗っていたときの仲間・岩吉（二十九歳？）と再会をはたした。兩人はサスケハナ号で別れて以来の再会であった。岩吉（ダンと呼ばれていた）は、イギリス領事ラザーフォード・オールコック（一八〇九～九七、外交官として福州・上海・広東、のちに江戸に滞在）方で暮らしていた。お互いたずね合うは、いまの境遇であった。オールコックは近々日本駐在のイギリス総領事として、日本へむかうことになっていた。

広東をおとずれて二週間ほどすると、岩吉がやって来て、オールコック氏がそこもとに会いたがっている、というので、広東のイギリス領事館を訪れた。話のなかで、通訳としてイギリス領事館に勤めてほしい、との懇望を受けたが、二つの理由から断わった。一つにはすでに岩吉が雇われているので、その職を奪いたくなかったこと。もう一つの理由として、アメリカ人とアメリカ政府の世話になりこんにちに至った身であるから、ここでイギリス領事館の雇いとなることは、道義に反する、とおもったからである。

五月十日——タットヌル提督が座乗する旗艦ポーハタン号が香港に入港した。スペイデンは早速同艦をおとずれると、彦太郎が乗船できるよう  
に掛けあってくれた。

同月十七日、彦太郎はポーハタン号に乗艦すると、退艦した士官の船室<sup>キャビン</sup>の一つあたえられた。翌日同艦は、上海にむけて出帆した。寧波を経て上海に到着したのは、五月二十七日のことであった。

二日後の二十九日、彦太郎は士官にともなわれて碇泊ちゅうのミシシッピー号をおとずれると、艦長ニコルソンや乗組士官らと会い、日本に回航のときはかならず同行させることを約束させた。

ついで彦太郎は、新駐日米領事として日本におもむくタウンゼント・ハリス（一八〇四～七八、のち全権公使）に紹介され、神奈川のアメリカ領事館付通訳になるよう依頼をうけたので承諾した。また上海滞在ちゅう、音吉（オットソン）という尾州の漂流民で、いまはデント商会の手代（番頭と小僧の中間の使用人）のことを耳にしたので、その男をたずねると、交互にかたる身のうえ話に懐旧の涙をながし、時の移るのを知らなかった。彦太郎が帰国の便宜をえて、日本へむけて出発する、というと、音吉はわがことのように喜び祝ってくれた。

一八五九年六月十三日——彦太郎はポーハタン号からミシシッピー号に移乗した。数日後、ミシシッピー号は、下田総領事ハリス、神奈川総領事イ・エム・ドール、彦太郎らに乗せて呉<sup>ウース</sup>菰を出帆すると、長崎にむかった。

同艦は、六月十八日長崎に入港した。彦太郎にとって九年ぶりの故国の風景であった。その後、彦太郎はアメリカ市民として、開国期の神奈川の米国総領事館付の通訳として、その卓越した語学力をもって、外交の第一線で活躍するのである。

栄力丸の旧乗組員のなかには、仲間よりもおくれて帰国した者がいる。が、かれらはそれぞれ波瀾に富んだ人生をおくった。たとえば——治作、亀蔵、岩吉、仙太郎、彦太郎、利七などである。いまかれらの帰国するまでの足跡を略記すると、つぎのようになる。

治作（アメリカ名・トラ）……………中国・金星門よりアメリカに連れ帰られたのち、サンフランシスコで税関船に勤めた。のち箱館へむかうアメリカの帆船で、安政六年六月四日（一八五七・七・二四）帰国した。その後の足跡は不明である（キャサリン・ブラマー『最初にアメリカを見た日本人』日本放送出版協会、平成元年十月）。

亀蔵（アメリカ名・カメ）……………中国・金門島において、治作といっしょにアメリカに連れ帰られた。サンフランシスコで税関船に勤めた。のち中国行の船にコックとしてのりこみ、香港にたどりついた。万延元年九月十七日（一八六〇・一〇・三〇）——遣米使節をのせた米艦「ナイアガラ」号は、石炭と水をつみ込むために香港に寄港した。このとき港内に碇泊ちゅうの米商船に乗っていた亀蔵は、使節に帰国を願いでた。それが聞き届けられ、同艦とともに帰国した。

仙太郎（アメリカ名——サム・パッチ）……………上海において米艦「サスケハナ」号に残されたのち、一八五七年（安政四年）アメリカに連れ帰られた。ペリーの第二回日本遠征艦隊に一水兵として加わり浦賀にやって来た。このとき幕吏の勧めと生命の保障があったにもかかわらず、恐怖心から帰国の途をえらばず、乗っていたミシシッピー号とともにアメリカに帰った。

同艦に乗っていた機関兵曹長ジョナサン・ゴープルの世話で、ニューヨーク州ハミルトン村にある「ハミルトン校」（マジソン大学附属中学）に一八五五年から翌年まで一カ年まなんだ。一八五八年三月六日（安政五年一月二十一日）仙太郎（Samuel Sentaro）は、ハミルトンのファースト・パプテスト教会で受礼した。

一八六〇年四月一日（安政七年五月二十一日）、仙太郎はゴープル夫妻とともに横浜に到着し、神



仙太郎（アメリカ名：サム・パッチ）

奈川の成仏寺に入った。仙太郎は十年ぶりで帰国したが、日本語をほとんど忘れていた。

宣教師ゴープル一家は、生活に不自由していたので、仙太郎はほどなく成仏寺を出ると、横浜の外人居留地に住むオランダ改革教会のアメリカ人ジェームズ・バラのコックとなった。のち夫妻とともに仙太郎はアメリカにもどった。

一八七一年（明治四年）十月——仙太郎は、帰国した。かれは静岡藩の学校に招聘されたアメリカ人の物理教師エドワード・W・クラークのコックとして雇われ、三カ年静岡でくらしした。その間に仙太郎は妻をめとった。のちクラークが開成学校の教師となると、仙太郎もいっしょに上京した。

一八七四年（明治七）十月八日——仙太郎は、東京府病院（現・慈恵医科大学）において脚氣により亡くなった。享年四十一歳であった。

葬儀は、東京神田駿河台のバプティスト教会のアーサー牧師の家でおこなわれ、本伝寺（東京都文京区）の中村家墓所に葬られた。墓石には「三八君墓 明治七年十月八日」とある。これは明治期の啓蒙学者・中村正直まさなの撰文による。

帰国後の仙太郎のくらしを特徴づけていたものは、さまざまな宣教師宅で送ったコックとしての人生であった。かれはなかなか料理じょうずであったようだ。

#### 〈参考文献〉

キャサリン・プラマー著『最初にアメリカを見た日本人』日本放送出版協会、平成元年十月。

足立和著『黒船に乗っていた日本人』徳間書店、平成二年四月。

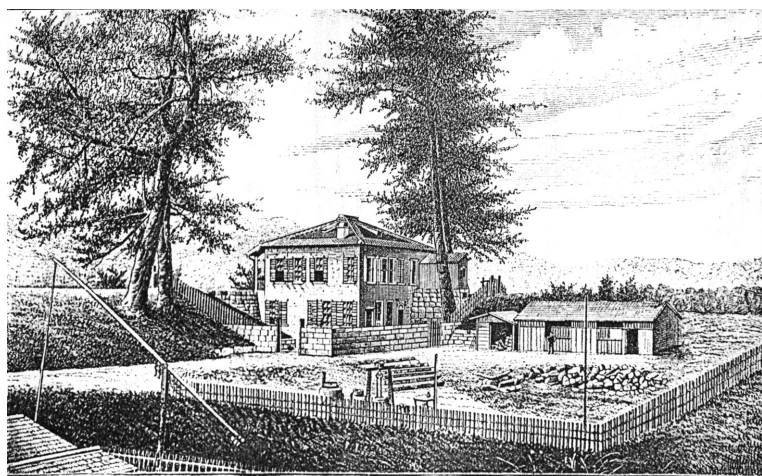
川島第二郎著『ジョナサン・ゴープル研究』新教出版社、昭和六十三年七月。

牧師・宮地慶信著「主のあしあと」（第一号、第二十三号——高松市上福岡町七五七、日本バプティスト恵キリスト教会）。

『日本バプティスト史略 上』東部バプテスト組合、昭和三年十二月。



文京区・本伝寺にある仙太郎の墓。〔筆者撮影〕



正面クラークの住居。そのとなりは仙太郎の家（静岡城内）。

伝吉（イギリス名・ダンIIキチまたは……嘉永七年二月二十二日（一八五四・三・二〇）の夜——伝吉は、浙江省平湖<sup>ビフワ</sup>の乍浦<sup>ツァン</sup>で置手紙をし、出奔した。その骨子をのべると、日本への渡海のことだけを日夜待っていたのだが、出船の話はなかった。ここ（船会所の二階）の食事はまずく、長居すると命もあやうくなる。ゆえにどこかの国へ逃げだし、身の住家をみつけ、永住するしかない。

出された食事は、粥や米飯、惣菜などから成るのだが、米は粗悪であり、おかずは脂こく、その臭気は大いに悩まされたという。





伝吉（イギリス名：ダン＝キチ）

乍浦を逃げだした伝吉は、上海にもどると、イギリス屋敷（デント商会）にかくまわれたようである。同年六月ごろ（一八五四・七）、かれは香港に姿をみせた。その後、広東のイギリス領事館にボーイとして住み込んだ。

安政六年六月二十六日（一八五九・五・二〇）駐日イギリス公使オールコックは、英艦サン普森号で江戸湾にやってきたが、同艦に伝吉が乗り組んでいた。

江戸において伝吉は、東禅寺・イギリス公使館付通弁として羽振りをきかせていたが、それが身のあだとなった。いつも洋服を着、馬をのりまわしていたから、市中において役人や酒に酔ったサムライと何かと問題をおこした。

かれは短気であるうえ、高慢な性格であった。みずから「イギリス臣民」であるといっていた。アメリカや清国で十年ちかい流浪生活を送っているうちに、性格がゆがんだようである。武士がいばっている社会に容易に与しなくなっていたようだ。

安政七年正月七日（一八六〇・一・二九）の午後四時から五時ごろ——伝吉はイギリス公使館の門口の旗竿の下に立っていた。そのとき深編笠をかぶった一、二名の武士によって、背中に短刀を突き刺され、一撃のもとに絶命した。

犯人も殺害の動機もわからぬままの白昼のテロであった。かれは館員のために女性を周旋するようなしごとをやっていたらしい。

三田のソバ屋「鶴寿庵」の娘・お花や本芝妙法院の寺娘・お香乃ら二人は、身持のよくない女であった。この二人は内所のくるしさから洋妾勤めに出ることになった。この話を口入屋と相談してまとめたのは伝吉であったようだ。ところがお花のソバ屋に酒をのみにくる客のなかに、野州（栃木県）の浪人・桑島三郎（二十五歳）という者がいた。かれはじぶんがほれているお花の口から、家のために東禅寺の異人のために奉公にあがらねばならない、伝吉なるものがわたしをラシャメン（洋妾）にしようとしている、とぶちまけたから、伝吉に天誅を加えようとその機会をうがっていた。どうもこの桑島という浪士が犯人のようである。

後日、イギリス公使館に奉公にあがったお花とお香乃は、文久元年五月二十八日（一八六一・七・



伝吉の墓（麻布・光林寺）  
（著者撮影）

五）の夜——水戸浪士らが同公使館を襲った第一次東禅寺事件のとき、二人ともベッドのうえで斬殺された。

伝吉の葬儀は、数日後、麻布・光林寺（臨済宗妙心寺派）の本堂で、二名の外国奉行、各国の公使館員らの合葬をえておこなわれた。柩は寺の裏寺にある墓地に葬られた。ちなみに、アメリカ公使館の通訳ヒュースケンも伝吉のそばに埋葬された。

伝吉の墓石の表面には、英文で碑文が次のように刻まれている。

DAN-KUTCI,

JAPANESE LINGUIST

TO THE

BRITISH LEGATION

*Murdered*

BY

JAPANESE ASSASSINS,

*29th January, 1860*

（イギリス公使館付日本語通訳ダン・クチは、一八六〇年一月二十九日日本人暗殺者の手にかかって殺害された）

また裏面には、日本文字でつぎのようにある。

安政七申歲  
（やすし）

禅了院伝翁良心居士

正月七日



伝吉は、漂流し救助されたのち、十年ちかく外国を流浪し、ついに帰国を果たした。が、人のうらみを買ひ、非業の死をとげた。その生涯はひじょうに波乱にみちたものであった。

#### 十四 伝聞でんぐん

安政四、五年（一八五七、五八）ごろ、鈴木国藏（天保十一年「一八四〇」ごろの生まれ）という者が、友人二、三人とともに外国船にのり、ハワイにやって来た、とその子孫に言いつたえているという。同人の次男マヌエル・クイニによると、国藏は明治元年（一八六八）にハワイにやって来たいわゆる「元年組」の通訳や世話をしたという。<sup>(9)</sup>

いままで語ってきたのは、みな船乗りであるが、変わったところでは江戸の芸妓げいぎがハワイに漂着している。

江戸芸者小染こぞめ（二十八歳）は、安政六年三月十六日（一八五九・四・一八）、上方見物のため浦賀から船便に乗った。それまでに深い関係をもった男が、二人も横死や刑死したこともあって、京都や奈良の寺院をまわって菩提をとむらうつもりであったらしい。ところが、彼女をのせた船が遠州灘にさしかかったとき、暴風に遭ひ、やがて漂流をはじめ六十日目にハワイに漂着した。

乗組員のほとんどは餓死していたが、彼女だけは意外にも命があった。ホテルにおいて途方にくれていると、アメリカの宣教師ジャンサーが、親切にいたわってくれ、サンフランシスコへ同行をすすめられた。小染はどうせこの世には、用のない身体からだだから、といった捨てばち気分になっていたから、牧師についていった。

小染は気まぐれから芸妓になり、柳橋の座敷に出ていた。神田今川橋の津之国屋惣兵衛という大きな材木問屋のひとり娘であった。浮世絵師・豊国のモデルになるくらいだから、相当な美人であつたらしい。

小染の肖像は木版画となって街に出回り、また羽子板の押絵にもなり、飛ぶように売れた。それが佐竹侯の目にとまり、三味線掘の屋敷に奉公に出るようになり、やがて殿様の愛妾になった。が、奥方付の老女松崎というものと大げんかし、酒ぐせのわるい小染は、松崎を三味線でなぐつて気絶させてしまった。

この事件のせいで、彼女は一年ほど座敷牢に入れられたが、上野東照宮の役僧・杉田大内蔵や宮様の協力によって牢を出ることができた。

その後、小染は柳島の寮で疲れを休めていたとき、押し入ってきた賊を刺し殺したために、座敷牢と賊殺しとで有名になり、すてばち気分から芸者になった。彼女はのちにお倉米の買占めなどをやっていた与力・鈴木藤吉郎の外妾になった。が、鈴木は罪科が明るみになり、権力筋によって毒殺された。また役僧・杉田大内蔵は、妓楼鶴屋の入りむことになり、名を鍋屋平四郎と称していた。が、宮様のお手許金を費消<sup>ひしょう</sup>したことが知れて獄門となった。

小染はいかがわしい過去をもつ女であった。宣教師のジャンセーは、品行方正なる紳士であり、小染はそのふるまいに眼をひられ、熱心なクリスチャンになった。彼女は英語をおぼえ、ジャンセーの世話で某富豪の子守りとなった。ついで家庭教師や講習会の講師にもなった。

彼女は「愛」とか「犠牲」といったことばの真の気持がわかるようになり、いまではまったく別人になっていた。明治十年（一八七七）春に、さいこの音信があったというが、渡米後の消息はようとして聞かない。

最近の研究では、お染という女性は無構の世界の女性であったと考えられている。その理由として――「江戸名所百人美女」（安政四年「一八五七」から翌五年にかけて作られた浮世絵）に彼女が登場しない。ハワイ漂着の事実がみつかっていない。矢田挿雲の『江戸から東京へ』以後、ほとんど新事実が確認されていない（白戸満喜子「創られた女――『安政三組盆』の津の国屋お染」『日本文学』46巻所収、平成9・10）。

#### 〈参考文献〉

矢田挿雲『江戸から東京へ 第一巻』芳賀書店、昭和三十九年十一月。

在米日本人会事蹟保存部編『在米日本人史（二）』在米日本人会、昭和十五年十二月。

\*

漂流を通じての日本とハワイの交流は、はるか鎌倉時代から明治初年までつづくのだが、それが一転して、国際的修好の段階に達したのは、<sup>(10)</sup>安政七年二月十三日（一八六〇・三・五）の遣米使節団のホノルル寄港にはじまる。同使節団が、ホノルルに滞在したのは約二週間である。その後も洋上で救助された日本人が来布するケースがいくつかあった。

明治七年（一八七四）アメリカの捕鯨船シプレー号がホノルルに入港したが、同船に竹下松五郎、長谷川久太郎ら十一名がのっていた。かれらはおそらく漂流民であろう。

明治九年（一八七六）二隻のアメリカの捕鯨船が、ホノルルに入港した。これらの船には、小林喜三郎（讃岐）、田原多蔵（福井）、文吉（新潟）、幸之助（東京）ら五名がのっており、みな上陸したという。<sup>(11)</sup>

## 十五 漂流民が伝えたハワイ事情

サンドウィッチ諸島（ハワイ諸島）のうちでも三番目に大きいオアフ島は、漂流民やこの島に立ち寄った日本人の眼にどのように映ったのであろうか。とくにオアフ島にあるホノルルの町やワイキキビーチを中心とする海辺は、こんにち世界中から一年を通じて観光客をよんでいる。

これから記す「ハワイ事情」は、いまのハワイの様子について語ったものではなく、一世紀以上もまえのハワイ——日本の年代でいえば、江戸時代のハワイのものである。

### サンドウィッチ諸島

これはアメリカと日本との間にあり、小島があつまって一つの群島をなしている。この群島を発見したのは、イギリスのキャプテン・クックである。その大きさは、日本の四国の半分ほどである（浜田彦蔵『漂流記』）。

ハフ国（オアフ島のこと——引用者）の大きさは、四国ほどである。七島あり、ひじょうに繁栄している。オアフ島は、この国の津（みなと）である。西洋の国から入港する船が多く、日本の大坂のような地である。遊女町などもある（「漂流万次郎帰朝談」）。

フホまたはオワホ（オアフ）というのは、島の名であり、同時にそれは王都（ホノルル）の名でもある。およそ北緯二十一度に位置し、港口は西にひらいている（南が正しい——引用者）。背後になだらかな山（クーラウ山脈）をめぐらしている。山頂までは半里ほど。山には背のひくい白檀びやくだんの類が生い茂っている（「蕃談」）。

港町には遊女屋はつきものであるが、当時ホノルルのばあい、林の奥にあったようで「土妓屋ハ林後ニ在リ」とある（「蕃談」）。

## ホノルル港

港は中央部で三町（約三百数十メートル）は幅があるが、水深が浅いので大きな軍艦は入港できない。そのため半里ほど沖に停泊する。しかし、長さ三十間ほどの捕鯨船であれば、港内に入ることができる。太陽暦の九月末から九月にかけて、捕鯨船が七、八十隻も入港し、マストの林がでさるほどである（「蕃談」）。

## ハワイ人

ハワイ人の先祖はどこからやって来たかについては定説がない。が、船体が二つくつついたカヌーに乗ってタヒチ島あたりから、西暦七五〇年から一〇〇〇年ごろに渡来したようである。ハワイ人の先住民は、ポリネシア系なのである。ハワイ人はおしなべて頑健な体格をしていたが、イモ類など澱粉質のたべものを多く摂ったり、習慣的過食のせいで肥満になりがちであった。

皮膚の色は、濃い褐色であり、髪をみじかく切っていた。「芸州善松北米漂流譚」は、ハワイ人の特徴について、「このヲワフの人物、男女共に坊主にて、顔色黒く、女のみは色少しく白く、丈高く、男は髪を剃刀又は鋏にて摘みたるも有り」としている。

## 住居

一般島民の家は小屋風のものであり、茅ぶきの、囲りに壁のないものであった。土間には藺に似た草をしき、そのうえにモナイというアンペラ（むしろ）のようなものを敷いた。が、外国人が来て暮らすようになると、住居は欧風に変わってきた。

家は古くはかや葺であったが、五十年前にアメリカがこの国を開国させてから、板また石を用いて屋根をふく方法をおしえた。板で囲んだ家が

多い。屋根をふく石は、港口にある石からはぎ取ったものである。ひとに寝すがたを見せたくないから、寝るときは戸棚のようなもの（ベッドか？——引用者）に入る（『漂流万次郎帰朝談』）。

## 気候

ハワイ諸島は、経度上、熱帯である。北東の貿易風がふくため涼しいとされる。ホノルルの平均気温は、二十三度ほどであり、いちばん涼しいのは一、二月。もっとも暑いのは、八、九月である。雨量は十一月から四月にかけて多く、六月から十月にかけてすくない（『世界文化地理大系 第25巻』平凡社、昭和三十二年四月）。

この国寒暑なく、春秋とも日本の八月のようである（『満次郎漂流記 全』）。

ハフ国の時候は、日本の九月のようである。年中ラシャ（毛織物）一枚を着ておればよい（『漂流万次郎帰朝談』）。

年中、夏であり、冬のない島である（浜田彦蔵「漂流記」）。

当地において気候の変化をみなかった。ただ暑気が強いとおもった。入湯する者を見なかった。多くの者は、海中に入って体を洗うだけである（『芸州善松北米漂流譚』）。

## 食物

ハワイの原住民の主な食物は——タロイモ（“ポイ”のこと。太平洋諸島のサトイモの一種）、サツマイモ、パンのき（太平洋諸島原産——パン質の果肉をもつ、くわ科の熱帯性常緑高木）、バナナなどのほか、魚や獣肉（野鳥、ブタ、犬）であった。当時、本島内において米を産出せず、アメリカや中国から輸入していた（『福永楓舟 三輪治家 共著『布哇群嶋誌 第一卷 布哇篇』加哇新報社』）。

食物は、田芋や唐芋（サツマイモ）などであり、それを常食とした。麦は上等のたべものである。米は諸外国から輸入したが、上等のものではなかった。魚についていえば、小鯛のようなものは、日本のものと変らない。磯魚は日本にないものが多い。魚をとることはへたである。日本の

海人あまのような者がおり、海中に潜もぐって岩の底にいるエビを捕える（「漂流万次郎帰朝談」）。

この地には、五穀ごこく（米・麦・あわ・きび・豆などの総称）や鍋釜なべかまなどはなかった（「芸州善松米国漂流譚」）。

ここに住む者は、朝昼夕とたべるものが違っていた。芋いもを常食としているため、はしや茶わんの類はない。いろいろな味わいを工夫した芋を飯台のうえにのせ、腰かけにすわって食べる。朝は大豆を黒くいったもの（コーヒーか？）をせんじてのむ。昼飯のときは、水をすくってのむ。夕飯のときは、日本のように茶をのむ（「満次郎漂流記 全」）。

タロイモの調理法は、日本人にとって珍しいものであった。まず地面に穴をほり、薪を入れ、そのうえに石を置いて焼きたてる。石が赤く焼けると、その上に水をかけ、石のうえに芋をおき、土をかぶせる。その湯気によって、芋はむしたようになる。つまり芋をふかして食べていた。

#### 土地とおもな建物

（ホノルル）港に突き出ている二つの岬は、ともに岩が積みかさなったものである。むかって左のほうは、長さ二百間げほど、右のほうは百五十間ほどある。

玉城（港のそばにある「ブームストロング砦」のこと——引用者）は、東西数十間、南北百間ほどある。城門は東にむかって開き、その左側にはイギリス本国（ヘアマメリカ）からあたえられた大きな旗（たて三尺、よこ五尺ほどの大きさ。紅白の横じまが染め出している）が立っている。

玉城は数棟の建物にわかれ、門内の空地は練兵場として用いられている。塁壁らいへき（とりでの壁）の下部は石を敷き詰め、そのうえは厚さ二間ほどの土塁になっている。全体のかたちは、正方形ではない。

玉城の背後と両側の三面——すなわち、とくに海に面した部分の守備は嚴重である。二歩ごとに大砲一門がすえてある。それらは青銅砲であり、四、五門ほどある。大砲のそばに、数知れぬほどの鉄の弾丸がつまれている。

町の海岸の四カ所に大砲がすえられている。どれも水ぎわから一町ほどのところにあるのだが、とくに砲台は構築されていない。

栈橋さんぽし（波止場）は、港の北端にある。大きな材木をT字形にならべて海中に架けたものである。銅板で覆った柱で、これを支えている。一見すると、橋のようでもある。ここにはいけ（小舟）が横づけになり、船の積荷をはこぶしくみになっている。



船の修理場は、岸に平行してあり、大きなろくろの設備がある。

牛の屠殺場は、港の南のはしにある。それは海に突き出して建てられた板小屋である。その小屋のそばに、牛をつなぐための太い柱が一本ある。ここで毎日、全島民の食用をまかなえるだけの牛を屠殺している。小屋の東南に、牛の皮を入れておく倉庫がある。

牧場はひじょうにたくさんある。その規模も小さきまでである。

市場は、たて三、四町（約三、四百メートル）、よこ二町（約百十メートル）ほどの広さである。毎日、午前ちゅうに盛んに取引がおこなわれる。衣料品、食料品、日用品その他の品々があつかわれる。住民が常食としているタロイモ（ポイ）も、ここで売っている。日曜日は全島民がしごとを休む日であるが、この市場だけは、一日じゅう混雑している。

ここは場所が広いので、市がおわると馬の調練に用いられる。

玉城の前は、市街地となっている。町の南端に大きな寺院（教会）<sup>(13)</sup>があるが、それは着工後七年もたつのにまだ完成していない。各国人の商店は町中に散在しているが、城の真東あたりに集中している。各国というのは、アメリカ・イギリス・フランス・スウェーデン・オランダのほか、ルソン（フィリピン）・オーストラリア・スマトラ・広東・福州などである（「蕃談」）。

#### 注

- (1) 近盛晴嘉著『ジョセフ・ヒコ』（吉川弘文館、昭和三十八年十二月）、二二頁。
- (2) 同右、二七頁。
- (3) 右におなじ。
- (4) George M. Brooke, JR: *John M. Brooke's Pacific Cruise and Japanese Adventure, 1858-1860*, University of Hawaii Press, Honolulu, Hawaii, 1986, p.14,

p.36

- (5) 同右、三七頁。
- (6) 注(4)の三八頁。
- (7) 右におなじ。

(8) 注(4)の一五六頁。

(9) 山下草園著『日本布哇交流史』（大東出版社、昭和十八年一月）、一一五頁。

(10) 同右、六頁。

(11) 注(9)の一一六頁。

(12) 高山純著『江戸時代ハワイ漂流記』（三一書房、平成九年四月）、一三三頁。

(13) Kamaiha'o Church のこと。一八三六～一八四二年創設。

参考文献

(写本) 「土州漂流人書」  
どしゅう

「土佐萬次郎漂流記」

「難破船帰朝記事」

「漂流記」(彦太郎のもの。木版、刊行年不詳、早稲田大学中央図書館蔵)

広瀬保庵著 『環海航路日記 上下』

(義眉山房蔵板、文久癸亥、内閣文庫)

ジョセフ・ヒコ原著  
鳴洲散士補訳

『漂流 開国之滴』  
異譯

(博聞社、明治二十六年十一月)

石井研堂校訂

『校訂漂流奇談全集』

(博文館、明治三十三年七月)

土方久徴  
藤島長敏共訳

『アメリカ彦蔵自叙伝』

(ぐろりあ そさえて、昭和七年十月)

玉井幸助校訂解説 『船長日記』  
ふなわき

(育英書院、昭和十八年五月)

荒川秀俊編 『異国漂流記集』

(気象研究所、昭和三十七年七月)

相川広秋著 『日本漂流誌』

(「日本漂流誌」刊行会、昭和三十八年五月)

室賀信夫  
矢守一彦共訳

『蕃談』

(平凡社、昭和四十年三月)

『日本庶民生活史料集成 第五卷 漂流』

(三一書房、昭和四十三年九月)

荒川秀俊編 『近世漂流記集』

(法政大学出版局、昭和四十四年八月)

荒川秀俊編

『異国漂流記続集』

(気象研究所、昭和三十九年三月)

河野太郎編著

『初太郎漂流記』

(徳島県教育会出版部、昭和四十五年十月)

石井研堂編

『異国漂流奇譚集』

(新人物往来社、昭和四十六年十二月)

大槻玄沢 志村弘強共著 石井研堂校訂『環海異聞』

(日本北洋材製材協議会、昭和五十一年六月)

川田維鶴撰

『漂異紀畧——付 研究 川田小龍とその時代』

(高知市民図書館、昭和六十一年三月)

池田皓詠<sup>あきら</sup>

『南海紀聞・東航紀聞・彦蔵漂流記』

(雄松堂出版、平成五年十月)

茂住實男

『漂流記談』——栄力丸乗組員・利七漂流記談の翻刻と解題一―三

(『大倉山論集 第三十六輯』第四十輯) 所収、大倉精神文化研究所、平成六年十二月～同八年十二月)

山下草園著

『布哇諸島』

(東京講演会出版部、昭和十七年五月)

山下草園著

『日本布哇交流史』

(大東出版社、昭和十八年一月)

阿部隆一編

『村垣淡路守範正著 遣米使日記』

(文学社刊、昭和十八年十一月)

吉森実行著

『ハワイを繞る日米関係史』

(文藝春秋社、昭和十八年十二月)

佐野鼎遺稿

『<sup>万延</sup>訪米日記』

(金沢文化協会、昭和二十一年七月)

『世界文化地理大系 第二五卷』

(平凡社、昭和三十二年四月)

近盛晴嘉著

『ジョセフ・ヒコ』

(吉川弘文館、昭和三十八年十二月)

須藤利一編著

『船』

(法政大学出版局、昭和四十三年七月)

バング・ソンジウ(方善柱)「宝順丸の米州漂着とその意義」

(『日本歴史』第二九五号所収、吉川弘文館、昭和四十七年十二月)

木村鉄太著

『航米記』

(青潮社、昭和四十九年九月)

島岡宏著

『ハワイ移民の歴史——新天地を求めた苦難の道』

(国書刊行会、昭和五十三年四月)

近盛晴嘉<sup>はるし</sup>著

『クリスチャン・ジョセフ彦』

(アムリタ書房、昭和六十年一月)

宮地慶信

『仙太郎の生涯その晩年』(「主のあしおと」に連載)

(日本バプテスト連盟恵教会「高松市上福岡町」、昭和五十四年～同六十一年)

川島二郎著

『ジョナサン・ゴープル研究』

(新教出版社、昭和六十三年七月)

足立和著

『黒船に乗っていた日本人——「栄力丸17名の漂流人生」』

(徳間書店、平成二年四月)

『海と列島文化 別巻 漂流と漂着・総索引』

(小学館、平成五年二月)

志賀富士男編 『志賀重昂全集』 （日本図書センター、平成七年二月）

小林茂文著 『ニッポン人異国漂流記』 （小学館、平成十二年一月）

高山純著 『江戸時代ハワイ漂流記——「夷蛮漂流帰国録」の検証』 （三一書房、平成九年四月）

『別冊歴史読本 異国人の見た幕末明治 JAPAN』 （新人物往来社、平成十五年十月）

田中啓介著 『奇談・音吉追跡』 （聖恵援産所、平成十五年十月）

\*

The Transactions of The Asiatic Society of Japan, Second series, vol. XVIII, 1939, *Japan and the United States, 1790-1853*, by Shunzo Sakamaki.

J. N. Reynolds: *Voyage of the United States Frigate Patomac, under the command of Commodore John Downs, during the circumnavigation of the globe, in the years 1831, 1832, 1833, and 1834*, Harper & Brothers, New York, 1835.

Cap. Sir Edward Belcher, R. N: *Narrative of a voyage round the world, performed in Her Majesty's Ship Sulphur, during the years 1836-1842*, vol. I. Henry Colburn, Publisher, 1843.

Lient. James D. Johnston, U. S. N: *China and Japan, being a narrative of the cruise of the U. S. Steam-Frigate Powhatan, in the years 1857, '58, and '60*, Charles Desilver, Philadelphia, 1861.

Sir George Simpson : *An Overland Journey round the world, during the years 1841 and 1842*, Lea and Blanchard, Philadelphia, 1847.

Frank Soulé, John H. Gilon, James Nisbet: *The Annals of San Francisco*, D. Appleton & Company, New York, 1855.

Manley Hopkins: *Hawaii*, Longman Green, and Co, 1866.

E. Warren Clark: *Life and Adventure in Japan*, American Tract Society, 1878.

*Géographie de l'Empire de Chine* 英文中國地理學叢書 Imprimerie de la mission catholique à l'orphelinat de T'ou-sé-wé, 1905.

*Comprehensive Geography of the Chinese Empire and Dependences* 中國地理叢書 T'U sewei Press, 1908.

Ralph S. Kuykendall: *A History of Hawaii*, The Macmillan Company, 1940.

George M. Brooke, JR: *John M. Brooke's Pacific Cruise and Japanese Adventure, 1858-1860*, University of Hawaii Press, Honolulu, Hawaii, 1986.

Nanette Napoleon Purnell: *O'ahu Cemetery -Burial Ground & Historic Site*, O'ahu Cemetery Association, Honolulu, Hawaii, 1998.

Joseph Heco: *The Narrative of a Japanese*, Vol. I, II, American-Japanese Publishing Association, San Francisco, Calif. U.S.A

Karl Baedeker: *The United States with an excursion into Mexico*, Karl Baedeker, Publisher, Leipzig, 1904.  
T. Philip Terry: *Terry's guide to Mexico*, Houghton Mifflin Company, 1923.